ソシュールの言語論、その再定置を試みる（要点等）

キーワード：「差異の二項対立関係」・「重ね合い、聞き合い」・「意識に届く」
「言語体系の集団的構築過程」「自然生物性から社会文化性へ」

序：人間の言語使用

ソシュールはスイスのフランス語圏、ジュネーブの貴族であり、その一族は代々優秀な各分野の学者を輩出している。その言語論は「実体概念から関係概念へ」とされる現代思想の始まりを画し、ギリシャ以来の言語名称目録論を覆している。私は主に（フランス語学者、哲学者）である丸山圭三郎の『ソシュールの思想』(1988 年)『ソシュールを読む』（2009 年）を通して、現代思想の観点から「ソシュールの言語論」を読み解いてゆきたい。

ソシュール（1857/11/26-1913/02/22）の言語論は言語使用の全体を、ランガージュ・パロール・ラングの三概念を創出し、その三概念をもって言語使用の場の時間経過を通しての考察といえよう。人間の言語能力（ランガージュ）を想定し、その実働する実践課程としての言語音声（パロール)、そのパロール（言語音声）がディスクール（言述）として実働化、メッセージを抱えて意味を表象し聞き取られるという構成である。その実働化にかかわるコードとしてラング（言語）の体系が機能する。

言語表象の場で、話し手と聴き手のコミュニュケーションを可能ならしめる人間の言語活動、その場の精神活動と発語運動、言語の表象側と受け手側のランガージュの重ね合いとしての言語的コミュニュケーション、その要諦、その開始点というべきは、ソシュールの示した「差異の二項対立関係」、その「差異と対立」への気づき、その構成と思われる。

言語表象側・言語聴取側が、双方向的に重ね合う、集団構成員全体のランガージュの駆動、重ね合い、その重合状態において・ラング（言語）の体系の母国集団的な構築過程を経過し、そうした言語的コミュニュケーションの中で、人類は言語の体系の共時変換を、そして大脳容量増大という、身体性（実質）の変容過程に至ったものとの想定される。言語使用は**人類の種の分化の駆動力として機能しているという視点から「ソシュールの言語論」を読み込みたい。**

Ⅰ．前段　ソシュールの言論と人間の意識作用について（１から４）

1.「精神の学[1]」としてのソシュールの言語論

聖書の創成記において示された言語観、「言語名称目録観」にも拘わらず、ソシュールの

[1] レヴィ＝ストロース/エリボン『遠近の回想』P200　みすず書房 1991 年 12 月 25 日発行

言語論は、自らを取り囲む生活世界に対峙する人間の、ある「差異への気づき」を抱え、その差異を自らの生活世界から切り分けるといった心的動態、その動態において生活世界への解釈を表象する、その表象の集合、「差異への気づき」を「差異の二項の対立関係」の重合構成として、母国語集団的に構築した体系として言語を捉えていると理解される。

その論点は、19 世紀の世界が切り開いた、近代的自我作用の展開過程として、生活世界、あるいは神羅万象を、科学的な視点で解明する主体の心的動態の在り様として、その「言語的な意味」そして「ディスクール（論述）」の展開過程として示され、母国語集団的な構築過程を背負った言語の共時変換、その中で消えゆく部分としての通時変換、関与的あるいは非関与的との表現になる、言語体系における二つの変換が示されている。

そうした言語論、生活世界を「差異の感興」をもって言語的意味を括り出し、母国語集団的な互いの「差異の感興」の重ね合いとしての言語使用、その体系の構築過程、その動態について、私はソシュールの言語論の言語の二つの性質（恣意性と線状性）と言語的コミュニュケーション過程を通して考察しようと試みる。

それはレヴィ＝ストロースの『神話論理　4 巻』で示された人間の精神活動の動態、諸変換の過程と、ソシュールの言語論における言語の性質、恣意性の動態との同調性を確認しつつ、「シーニョ（言語の意味の単位）」の宝庫たる言語の体系の在り様（第二の恣意性）と神話論理の中の変換との相同性を見出しつつも、ソシュールの言語的世界、その母国語集団的な変換過程の現在と、レヴィストロースの自然生物性から社会文化性への移行の過程にあるとする人間存在の理解について、ソシュールの言語の線状性と自然生物性、恣意性と社会文化性、その互いの同調性を考察する。

「神話論理」を生み出したアメリカ先住民の精神の流れは、ソシュールの言語論においては、ラング（言語）の体系、言語の恣意性と重なり合う、自らの生活世界に対峙して、体験する、あるいは遭遇する差異の感覚、感興、その「差異ゆえの亀裂をめぐる調停」の流れとして考察する。

「それは元に戻る事はできないのであり、消す事のできない変化、刻まれた差異のあちらとこちら側双方を対峙させる二項対立を、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約を図ってゆく、その動態と言えよう。」

こうした精神機能の流れ、その総体は、ソシュールの言語の恣意性とされる人間の精神機能の駆動態として、その様式、恣意性を限定する言語の線状性、発語運動上の制約関係、その二つの間の相互作用、重合状態の中での、言語の意味の単位「シーニョ」の創出過程

書式を変更: フォントの色 : 緑

書式を変更: フォントの色 : 緑

書式を変更: フォントの色 : 緑

と重なる。そしてまたその「シーニョ」の格納様式、群化の構造として構築されつつある言語の体系と重なり合う動態、その精神の流れをもって構成されるところの体系性、その構築される構造として理解される。

書式を変更: フォントの色：緑
書式を変更: フォントの色：緑
書式を変更: フォントの色：緑
書式を変更: フォントの色：緑

①　人間の言語能力と「差異への感興」「差異と対立」「同一性」について

参照）思想 P113　121　123・124　「意味の源泉」とは何か？「ラングという体系に依存する価値にほかならない」「一つには言語主体が樹立する差異の対立化運動から生まれ」「二つにはこの実践が獲得する社会性に裏付けられて確立する。」P97「すべては、差異を対立化する語る主体の活動と意識から生まれる。この対立化現象こそが真の単位（ユニテ）であって、ソシュールは《現象 phènomene》と《単位 unitè》をほとんど同義に解しているのである。」「言語の中には差異しかない」「すべては、これらの差異を対立化する語る主体の活動と意識から生まれる。」と続いている。

ⅰ）「差異の感興」について

言語の意味を抱く人間の精神機能について、言語表象者においても、その音声を音響イメージに繋ぐ聴き手においても、私の表現では「差異の感興」と言う精神状態を想定し、言語音声、その響き合いの差異・違いとして、切り分けつつ、その「音」と「意味」が繋がる、絆づけられるという精神機能の動態を私は「差異の感興」としている。人間の生活世界の切り分け、解釈としての動き、それらは人間の言語使用への動因、契機であり、その場での人間の「指向」において、「差異の感興」が生まれ出でつつあるという、その母国語集団的な蓄積過程を、言語の意味の生成過程として、ソシュールの言語論を読み込むという感じである。

「われわれの意識に届く」と表現される状態は、届いたところの「差異の感興」の在り様としては、なんだかの対比、対照して「差異」を認め、同一ではないという「感興」であろう。その感興、認識をもたらすところの、生活世界・外界・実体に囲まれて、ある対比関係（対立する２項・二項の差異[2]）を構成して、何だかの「同一性」にはあらずとする心的な解釈、**感覚予見**を抱える状態に落ちる、その状態を「差異の感興」と、私は表現している。言語音・その構成要素音素の配列関係、集合である「シーニョ（意味の単位）」、その間でもなお「差異の感興」を生じつつ、音響イメージを抱くところの人間の心的機能といえようか。

感覚予見：ムーアの造語。児玉聡の説明によれば、「視覚、触覚などの感覚を通じて意識に表われるもの」である。心理学などでは感覚単位（かんかくたんい）と訳される。

[2] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P79　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

ii）「差異の二項対立関係」について

「差異の感興」を運ぶ言語使用の場の、その解釈において、差異とは、その比較関係は複数間の問題ではなく、対比関係、すなわち「二項の対立」関係を構成して、その非同一性として現れる、その比較認識における差異と言う理解がソシュールの理解であろう。

そしてまた、「差異の感興」は、その取り巻く生活世界において、何だかの「差異」、その事が心的に響く状態、「感興」の由来、原因、源への解釈を含みつつ、「差異」とは一つの比較関係の結果として、その比較関係とはＡ対Ｂと言った２項の対立関係を構成しての「非同一性」であろう。その「差異」を心的に抱えつつ、音声表現（あるいは叫び）とともに心的に、あるいは脳内に取り込むという、その「差異」を「二項対立関係」「on/off」の形式として、その構成において自らの指向を脳内に、あるいは心的に定置する、その構成を「差異の二項対立関係」としていると理解される。

指向：「指向とは、ランガージュによる言語外現実の一つの解釈であり、差異化です。そうして、世界が差異化されると同時に、主体の意識も方も同時に差異化されることを見逃してはならないでしょう。[3]」としている。

iii）　言語の体系・「差異しかない」という意味合い

言語の二つの性質のうちの恣意性は、自由・恣意に展開する類推作用、人間の精神機能の動態を示しており、そして他方の線状性は音声言語の発語運動、表象過程、一筋に刻々と連ねるべく発語発声上の、身体運動上のコントロールに係ると思われる。

ソシュールの言語論は、言語の意味の単位「シーニョ」を措定し、その構成は「音」と「意味」の一体的な構成として、「音素の配列関係の差異」をもって音響イメージへ、さらに意味へと繋がれる、意味の側からも音声の側からも互いは一体的に絆づけられているとする。この構成からは「言語的意味」は、人間の精神運動により、そして「言語音」は「言語音発声」という人間の身体運動により、その二軸の人間活動、その重なり合い、同時、同調的な駆動状態としての言語使用・活動が想定される。

こうした言語使用は、自分を取り巻く自然世界・あるいは外界・実体・現前・実質の世界（substance）に対峙して感じとられた「差異の感興」・心的動態、その解釈の形式としての「差異の二項対立関係」の構成とさてており、「丸山圭三郎はそうした言語使用の場の力動について、「主体の活動と意識、その中には差異しかない」と指摘しており、この精神機能の動態、精神活動についてであろうが、「差異を対立化する語る主体の活動と意識からすべては生まれる[4]」「言語の中には差異しかない」と表現している。

---

[3] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P45　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

[4]　丸山圭三郎『ソシュールの思想』P97　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

この関係、言語使用を進める人間の意識世界は、「差異の二項対立関係」を構成し、その形式から括り出す言語的意味、概念性を抱え、それら意味の間の差異関係、意味の配分関係を、その非同一性により記憶する「単位」としての、**「シーニョ」である。その「シーニョ」の音素配列の差異、その差異と同調的な音響イメージの差異、それらの湧出をへつつ、「音」と「意味」を絆づけつつ、**「差異の感興」「差異の二項対関係」の重合状態を構築し、それら「シーニョ」の格納庫とされるラング（言語）の体系、差異のみによって精神機能に届く、あるいは「差異の感興」をもって言語的意味を湧出する、その記憶を脳内に蓄えつつの、人間の類推機能の展開過程を経た言語の体系性であり、それに同調する「群化」の構造としての母国語の体系が説明されている。

参）思想 113　言語について「この歴史的・社会的事実、すなわち非自然的と言う意味での恣意的価値の本質は、記号学によってしか解明されないのである」。　思想 138　「ソシュールの実質（substance)、形相(forme)の対立概念」―についての記述、「言語以前に存在する連続体としての心理的現実と音声的現実のことなのか。」ソシュールの実質、形相の対立概念について、同P140-141「主体はこの時、事物を差異化するのみならず自らの意識もまた同時に差異化される。人間は世界に意味を与え、同時に意味を与えられるのである。」読む P212　・「関係的同一性・実体的同一性の差の強調」と言う文脈・215 の「すべての記号は、純粋に否定的な相互位置関係に拠っている」　思想 P139・単位とは何か＝同一性とは何か？・言語の体系の中でどう扱われているか？であって、全てはラングの体系内の関係による・体系は既に関与的である、差異の概念と恣意性の概念は切り離す事ができない　恣意に展開する観念作用の中では、差異のみがメルクマールである。　読む p 238 思想 P154　「恣意性と示差性は二つの相関的特性である。」思想 142「言語の中には差異しかない。」「差異のモザイク」　読む P151 の図・(substance) 実質・(forme) 形相

辞項という単位は、「辞項と辞項の差異の対立化という現象であることも、その対立化現象を樹立するのは語る主体の意識であることもはっきりと理解されるでしょう。[5]」とされている。そして私は語る主体だけでなく、聞く主体もまたその表象されたパロールを反芻して重ね合う、双方のランガージュ（言語能力）の関与を想定し、そうした言語のコミュニュケーション過程を考え、この重ねあいには類推作用が係りあい、双方の類推、連想的展開、その語り、聞く側双方の恣意性が想定されよう。

②　主な論点

[5]　丸山圭三郎『ソシュールの思想』P155　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

ⅰ）時間概念・空間概念の醸成と集団的な言語使用

「差異への感興」は、やがて人間における記憶的な時間の生成、人間意識の複層性（フロイドの無意識など人間の複層的な心理構造）をもたらし、**時空を超えて連想、類推する象徴機能、概念性・観念性を産み出す心的動態そのもの、そしてその源として想定されよう。**

人類種の進化の過程には、大脳容量増大という実質の変化が必須条件であろう。そこでレヴィ＝ストロースの言う「自然生物性から社会文化性へ移行する人類」という構図、人間理解を重ね合わせるならば、その社会文化性を醸成する生命活動が言語的コミュニュケーション過程であり、そこで人間の言語能力（概念化・抽象化作用）である「ランガージュ」の集団的駆動を必要的に想定せざるを得ないと思われた。母国語集団内での言語表象の聞き合い、その意味を揺らしあい重ね合う、集団的なランガージュ（言語能力）の交互作用の中で、人類は言語的コミュニュケーションを、社会文化性への移行のエンジンとして、種の分化の過程を生き続けたとして想定される。

あまねく生命現象を覆う自然生物性の一環としての人間の身体運動の制御の体系、その言語の性質の中の線状性として、他方の人類において獲得された恣意に展開する精神機能の動態「恣意性」を限定する線状性、その重合としての言語の表出過程、この二面はレヴィ＝ストロースにおける「自然生物性から社会文化性」への移行と言う人間の存在様式の在り様に重なり合う様態として、ソシュールの言語論における言語的コミュニュケーションを定置することができよう。

差異への気付き→現在と過去→時間概念の醸成・記憶・空間概念の醸成
（人間意識の複層性を生み出す・フロイド・ユングの潜在意識、その謂い）

ⅱ）「シーニョ」の音（シニフィアン）：その音素の配列関係からなる記号的構成としての「シーニョ」であり、この配列関係間の「差異への気づき」「差異への感興」が音響イメージと絆づけられると想定されよう。（聴覚機能と聴き手の意味理解と「差異の感興」）

ⅲ）　関与的・非関与的について

差異への感受性への刺激、深化→言語使用、集団的な言語能力駆動状態

差異への気付き・感興→→大脳神経伝達物質の反応系に入る→→意識に届く

→大脳神経伝達系の反応経路に落ちる経過（**関与的**）→脳容量の増大
（『ソシュールを読む』の p151 の図参照）

(B)substance　人間を取り巻く「生活世界」、実体・現前
非関与（人間の意識作用・認識を非経過）

(A) forme　「差異の感興」をもって「差異」を解釈した（人間の意識作用・認識された像）（恣意的価値の重合・文化性）、**関与的・脳機能への関与が生じる場合**

言語的世界：言語的意味とその区分けられ方は、言語世界での意味の範囲（価値）を配分された結果であり、人間の意識・脳機能への input(on/off)・神経伝達系への関与（たとえば官能基の関与）・差異の感興を捕捉する神経伝達系の動きとの連動関係を想定する

「たとえば日本人にとって［r］と［l］の音的差異と言うものは、別のイーミックな視点から見れば実体らしく存在するかもしれませんが、私たちの意識には到達しません。[6]」しかしフランス人や英国人にとっては関与的差異であり、日本人にとっては非関与であって意識には届かないわけです。実体と解釈には、それぞれの文化において、差異があり得ることがわかります。これがソシュールの言う関与的・非関与的の区別である。

イーミック：言語学者のケネス・リー・パイク（Kenneth Lee Pike）が作った用語で、以下のように、人の行動や、文化、言語を分析をするときの視点の違いを示します。
エティック：外側・第三者の視点から分析すること（ｒと ｌの違いを意識できない）
エミック（イーミック）：内側・当事者の視点から分析すること（ｒと ｌの違いを共有）

２．コミュニュケーション関係

①　音声表象を聞きあう交互作用、

「差異の感興」その反復・重ね合い・揺らし合い・集団的構築へ：
（コンテクスト｛「状況」「前後関係」「脈絡」｝の解釈の重ね合いは、コミュニュケーションの水準を、時空を超える・類推作用の重ね合いとして、その動態としての言語の恣意性の深まり、拡大をもたらしうるであろう。）

②　（コミュニュケーション過程）：ランガージュの双方向的・集団的な駆動

聞き合い揺らし合う集団行動・話者のランガージュの発動/自身のランガージュ駆動で組み直す、こうした交互用、聞き合い、揺らし、取り込み合うランガージュの活動の総合あるいは重合としての、母国語集団・人類集団における言語使用、ランガージュの同時重層的駆動の中で、差異への気付き、「差異の二項対立関係」の揺らぎが引き続く中で、聞き合いながら展開する言語使用は、差異への気付きの深まりの過程として想定される。

集団共通の生命危機とその弛緩、その中で交わされるであろう「叫び的な集団表象」その集団感情・表象の共有、聞き分け、共有しあう過程→話し手と聞き手は混然一体であろう

[6] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P155　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

③　ラング（言語）の体系

言語表象を聞き取る側の「意味理解」は、パロールの解読として、その音響イメージを言語的意味につなげる、紐づける、ランガージュの駆動として、言語音声から意味を含意して、ディスクールとして構成する過程であろう。この場で音響の「差異」を、意味に繋ぐルール、習慣性を抱えつつ、脳機能として駆動する体系が想定される。この言語音声と言語的意味、そしてそれぞれの音素の配列関係、音響イメージ・含意される意味をもって、ディスクールに繋ぐ体系（ルールの集合）としての、母国語言語の体系、ラング（言語）がイメージされる。

ソシュールは「ラング＝受動的なもので集団の中に存在する。これはランガージュを組織化し、言語能力の行使に必要な道具を構成する社会的なコードである。
続いて、「パロール＝能動的で個人的なもの。次の二つのパロールを区別せねばならない。[7]」として、「（１）ランガージュを実現するための一般的な諸能力の使用（発声作用など）（２）個人の思想に基づいた、ラングと言うコードの個人的使用」として、ラングとパロールの関係を纏めている。

④　**ランガージュの集団的交互作用：**集団全体の言語使用
　記号的構成で括り出される**「言語音声」と「意味」の一体的構成単位「シーニョ」**
「差異の二項対立関係」を構成して括り出された意味・その単位「シーニョ」
「シーニョ」の格納庫と言う表現になる**ラングの体系**
差異のみをメルクマールとして群化（グルーピング）し、シーニョを格納する言語の体系

集団構成員全体のランガージュ駆動・「差異の感興（意味と音の一体関係のシーニョ
その重ね合いが、言語的コミュニュケーションの現場・実践課程と想定され、
その経過において、集団的な大脳容量の変化・集団の言語使用関係、やがて人類種の分化の過程が想定される。
（ランガージュの双方向的駆動・母国語集団的なランガージュの駆動・重ね合い）
【通時態】あるいは【特定共時態】へ・言語の体系の母国母集団的構築過程

言語的コミュニュケーションと種の形成の伴走関係
双方向的なランガージュの駆動・聞き合い：他者のランガージュの発動を受けて動きあう事を想定、自身のランガージュで組み重ね合う集団的な脳機能の駆動・その脳機能が集団的に浸透・敷衍し、身体性（脳機能の容量増加）実質の変容まで至る過程を想定する

[7] 丸山圭三郎『ソシュールを読む』P188　岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

まとめ１．２）：

人間における時間の観念、時の流れを人間の意識に届けるもの→「差異の感興」

現在時点と先ほどの差異、何だかの差異ゆえの感興、差異への気付き

→今と過去の差異といった、時間概念を醸成し、従って空間概念を醸成

→その経過の中で他者性への気付きを醸成し

時空を超えて飛翔する人間の精神機能の獲得：言語の恣意性・

それは自然生物性から社会文化へと動く、人類的な意識活動、

それが脳機能の深化・その進化過程とともに動いた精神機能獲得であろう

（時間・空間概念の生成→時間・空間の差異への気付きは伴走的であろう）

言語集団的な言語使用（話し手と聞き手のランガージュの同時駆動）

＝双方向的なランガージュの駆動→言語の恣意性のレベルの拡大へ

差異への気付き、重ね合い：言語的コミュニュケーション（関与的変化へ）

意識に届くところ迄→社会文化性への移行の開始としての言語的コミュニュケーション

ラング（言語）は、その活動を規律し意味に繋ぐルールの集合であり、

母国語集団的に人間の脳内に蓄えられている体系であろう。

（意識に届く―関与的変化－脳内伝達物質の関与が生じる）

３．言語の二つの性質とそれに対応する人間の二軸の意識・精神作用

言語のふたつの性質（恣意性と線状性）

①　「恣意性(非自然性)」（意識上）次々と言葉「シーニョ」を選ぶ人間の**類推作用**・時空を自由に超えて展開する**精神運動：**その性質をソシュールは**「恣意に展開する類推作用（非自然性）」**としている。この性質こそが、概念化・観念作用、社会文化性の謂いであり、それは人間の精神運動が獲得した基本的な様態、性質といえよう。

※恣意性：「個人の自由選択に任されているという意味で恣意的なのではない。それは概念との関係において恣意的」とされる。「それをこの概念に結び付けるものは、自らの内に一切持っていないという意味である。社会全体も、シーニョを変える事はできないであろう。というのは、過去の継承が、シーニョに進化事実を押し付けているからである。[8]」この表現で言語は歴史的に構築されているという時間性を、ソシュールは「文化的化石」との表現で示していると思われる。

[8]　丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P201 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

② 線状性（意識下）一筋の時の流れに乗せて言語音声を連ねる、**発声運動上の拘束、習慣性を伴う、**音声言語の音素の配列上の性質。それは**【一筋に・次々に（線状的・継時的）であらねばならないという要請であり、**咽頭の構造、舌運動などの拘束下で、**発音発語の習慣的流れを負う身体運動上の制限、拘束の様態。**

この二つの性質（線状性と恣意性）の重合の中で、線状性からの要請である「結合価」を担いつつ、「連辞の型」を産み出す可能態[9]としての「シーニョ」。この意識下で進む線状性の要請と意識の上で進む恣意性（類推作用）をもって動く精神運動、その二つが同時に駆動する言語表象の過程、言語的コミュニュケーションが想定されている。

※連辞の型：既存の辞項群からの連想作用によって、ある辞項（「シーニョ」が慣用的に結合してパロールの連鎖を、ディスクールを形成する線的な関係、型。）
※結合価：各「シーニョ」は言語表象場面で他の「シーニョ」と結びつき得るその可能性、地位（結合価）を担って、ラングの体系内に格納されている

③ 連辞の軸と線状性・連合の軸と恣意性について
ⅰ）連合の軸：言語の恣意性に係わる、（恣意に展開する**類推作用・**精神機能の軸）
ⅱ）連辞の軸：言語の線状性に係わる（身体機能・身体運動のコントロールに係わる軸）
「単に常套句としての型をさしているのではなく、連合関係（類推作用に対応する―注筆者）におかれたすべての語は、先にも述べたように形態と機能の一体化したシーニョなのですから、潜在的に他のシーニュと結びつき得る〈結合価〉valence を担っていて、さまざまな連辞の型を生み出す可能態である[10]」

それぞれの「シーニョ」がその時に適切、妥当する他の「シーニョ」を選び（類推作用・連合の軸）、それらは結合価をもって結びきつつ一筋の糸として言語音声を連ね（線状性・連辞の軸）、ラング（言語）をディスクールの要請に適うべく活動化すると想定される。その刻々と一筋に連ねるべく音声の構成上、そして意味の構成上の要請にかなう配列関係、その発語を進める軸、それが意識下で進める連辞の軸とされる。

4．言語的コミュニュケーションの聴き手と話し手

① 言語表象側（話し手）の意識その動態：
言語表象側：類推的に意識上の働き：ラングの宝庫から「シーニョ」を選び（恣意性）、同時に身体運動（発声運動）を司る無意識的な意識（線状性）、発音上の習慣性（連続発

[9] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P172 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日
[10] 同上

音のしやすさ等、身体運動性からの習慣性）をもって言語音発声を進める。

線状性（意識下）と恣意性（意識上）の連動

言語の二つの性質の、言語表象の場面で同時的に駆動する葛藤状態・そうした同時駆動性

(恣意性を線状性が限定しつつ、二つの性質が重合する言語コミュニュケーションの過程)

人間の意識下、上の動き、その複層的構造は、**身体運動性と精神運動の重合・葛藤状態として、その揺れ・揺らぎを、刻々と表象可能となす言語の記号構成（音素の配列関係）**

②言語を聞き取る側の意識・その動態：

「聴き手の「聴取」もまた一つの「言語行為」であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする「解読作業」である。ここで働くのが、ソシュー ルが「配列作用」と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの「存在理由」がある。[11]」

聞き取る側の意識：音素の配列関係の差異による音響イメージの湧出

※（ヤコブソン）[12]の指摘：言語音声発声時には、音素の弁別特性の内在的価値が指摘され、「鋭い音素と鈍い音素の対立・明と暗・とがりとまるみ・細さと太さ・軽さ重さ等イメージも影響がある」との指摘からは、音響イメージと言語的意味との絆、そうした概念生成や象徴機能の動きに、多方位な習慣的意識の流れが指摘され得る。

音響イメージを意味に繋ぐ精神機能：「シーニョ」に係わる「無意識からの指定」をすすめるランガージュ（言語能力）であり、さらに「シーニョ」間の「差異」をもって「群化」の体系を抱える「ラング」であり、その「ラング」が「ディスクールとして活動化される」経過は、ラングの体系内に格納されている「シーニョ」が類推的に選ばれて、それぞれに互いに絆が結ばれる、関係づけられたという事であろう。その意識作用の中の、意識の上と下とされる動き、その人間の精神機能総体、それを発動する連合の軸と連辞の軸、その協働・重合的な動きが想定される。

③　言語の二つの性質（恣意性と線状性）と人間の意識作用の関係

言語の二つの性質　１．人間の自然生物性（身体運動性）発声・発語活動・・**連辞の軸**
線状性・一筋に次々と初性・(意識下・無意識的コントロール)
２．人間の社会文化性（精神運動性　象徴機能・概念形成）

---

[11] 末永朱胤
https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-30-05.pdf　P96

[12] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P154　みすず書房
2008 年 11 月 10 日

恣意性・時空を超えて展開する（意識上での類推作用）・・**連合の軸**

第一の恣意性は、「音」から「意味」へ、「意味」から「音」へ、双方向的一体的な絆
言語の意味の単位「シーニョ」＝「シニフィエ・意味」＋「シニフィアン・音」
音と意味の絆は、双方向的で一体的・・第一の恣意性
第二の恣意性は、言語（ラング）の体系の各「シーニョ」間の横の関係

「格納された「シーニョ」間の横の関係は類推作用に重なる第二の恣意性を体現している。聴き手のランガージュ・話し手のランガージュにおいて、二つの性質の重ね合いにおいて、言語的コミュニュケーションを達成すると、理解される。

まとめ（3-4）言語的コミュニュケーションと人間の精神機能について
言語の二つの性質（恣意性と線状性）は精神機能の中の二つの軸を反映している
連合の軸（精神機能としての類推作用・時空を超えて展開する・恣意的）
連辞の軸（身体機能をもって身体運動としての言語音発声・経時的・線状的）

言語の二つの性質に対応する、人間の身体運動（発声運動）そして精神運動（類推作用）そのコントロールする脳機能としての二つの軸が想定されている。
その二軸は、言語的コミュニュケーションの場のコンテクス（状況）の解釈、生活世界あるいは実質（substance）の解釈としての言語的意味を抱えた「シーニョ」の連鎖、その表象過程において、互い重なり合いつつ、人間の意識の上・下において稼働を進める精神機能の二つの軸として理解される。

中段Ｉ（５から６迄）　ソシュールの言語論とレヴィ＝ストロースの変換

5. 記号的構成の言語の意味の単位「シーニョ」
「音と意味についての６章」P102 の「シーニョ」の図・「シーニョ」の構造

上図：ヤコブソンの解釈において、「シーニョ」の外側の矢印は双方向を向いており、その事は音響イメージ（Signifiant シニフィアン/能記）と意味（Signifie シニフィエ/所記）

の間の絆は双方向、音響イメージと言語的意味は一体的、同時発生的に結びついていると言う解釈になろう。

① 外側矢印の双方向が示している事　言語の記号的な単位「シーニョ」と人間の意識

ｉ)「シーニョ」は「言語音声」と「言語的意味」が一体的に結びついた単位・

「音・シニフィアン」＋「意味・シニフィーエ」

「音響イメージ」としての「意味」を抱く記号的な単位

「シーニョ」の「音と意味の絆」→「第一の恣意性」→「無意識からの指定」

音素配列関係互いの、「差異への感興」を抱き音響イメージへ

ⅱ）言語的な意味は、言表する側が、己の生活世界の解釈、「差異の二項対立関係」として恣意に構成して括りだす、「解釈」としての言語的意味、

時々刻々、機動的（離散的・デジタル的）に捕捉可能な記号的構成において可能

「シーニョ」は **12 対の音素の示差標識の組み合わせ（ヤコブソンの定式化）**

音響イメージ性を、意味を抱えた音素配列の単位。

言語音声は音素の線状的な配列構造→言語の線状性と恣意性の葛藤状態での発語

「おしひろげ、うちひしがれる」という形相性をなす「シーニョ」の非実体性とは、人間の意識、精神機能の展開過程において、類推作用の恣意なる動態において、言語表象場面で人間の意識においてイメージされた意味であり、表象側、聴取側双方に於いて、音響イメージと重なる、「シーニョ」としての意味であり、その場での「差異の二項対立関係」をもって括り出された意味、あるいは近似する他の言語的意味「シーニョ」と関係において、配分されたところの意味、現前の事実ならざる「シーニョ」の意味として理解される。

そこで、言語表象に係る言語音の記号的構成・時々刻々、機動的（離散的、デジタル的）に配列される音素集合の構成の揺れ、「おしひろげ、うちひしがれる」と言う「シニフィアン（言語音」」の構成、その音響イメージの差異を聴覚的に捕捉する「差異への感興」

聴き手の聴覚機能、そのイメージ性であろう。

人間の聴覚機能・意識作用→→音響イメージへ　（恣意であって類推的・習慣性）

※「音響イメージ」は視聴覚等五感が動員されて意識内に生じる・ひとつの概念性

（人間は、言語音声の響き・音響の中（音響の差異の感興故に生じる）に、

「言語音」と「言語的意味」を一体的に重ね合わせると理解される）

② 音声（音素）の記号的構成による「シーニョ」・互いの差異の捕捉とラングの群化

音と意味の一体的な結合状態として、その「音響イメージ」としての言語的意味、その

「音」と「意味」が一体的に結びついた、言語の意味の単位を「シーニョ」としている。そして「シーニョ」はラングに格納されているというのである。それは（連合の軸上で、類推的に選ばれるべく、「群化[13]」の体系を成して、ラングに格納されているとされる。

群化：類推的秩序の達成には、互いの差異によって〈群〉をなす・「一群にあつめること」（P169）・ラング内「シーニョ」の格納の体系である「群化」において、恣意的に選択され結合されて、ディスクールの要請を達成する。
「連合群の内部で何を変えれば単位（意味の）を差異化し得るという事を、我々は知っている。だから連辞が作り出される瞬間には連合群が介入しているのであって、連合群無しには連辞は形成されないと言える[14]」　（連合と連辞の同時駆動の様態）

言語表象の場の人間の意識について：音響イメージの差異関係が意識に届くとは、「音」と「意味」の一体構造である「シーニョ」において意味をも含めて意識に届く。

・聴き手において「シーニョ」の音素の配列関係、その差異関係が意識に届く**（関与的）**言語的意味の間の差異関係（差異の二項対立関係の構成を通して）から、意味の配分がなさされる、という事であろう。**その状態において初めて関与的、意識に届く**
・話し手側においては、ディスクールを言語音声（パロール）として構成する場で「シーニョ」をラングの体系から恣意に選択し、連辞の軸において繋ぎつつの、発声過程が進むものと理解され、ディスクール（意味）を持って音声表象が配列される**（関与的）**。
　その集団内のランガージュ（意識内）の重ね合いは、集団的に差異の感興の浸透・敷衍の過程を経つつ言語の体系性の社会的構築へと向かう事が想定され、集団内の、差異の感興・その記憶・反復において意識内への刷り込み、意識に届く、その集団的記憶の醸成へと向かうとして想定される。（大脳神経組織への伝達・刷り込み過程、その集団的な動き抱えるであろう。）

6.　言語の記号的構成「シーニョ」と言語音声・音響象徴性

参）『ソシュールの思想』P113

　時々刻々（継時的）、恣意に展開する人間の意識、精神機能の展開、その動態
　　デジタル的、離散的・機能的に捕捉可能な音声言語の記号的構成（音素が基本単位）

※1950 年代、レヴィ＝ストロースの生涯の友ヤコブソンはトルベツコイの音素の発見を踏まえて、世界中の言語音声を 12 対からなる弁別特性（二項対立）のセットとして整理をし

[13] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』P169 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日
[14]　同上 P168

ており、それはソシュールの言語記号論の構造をなぞるものであった。音素の「二項対立する差異の 12 セット」の配列関係、その差異をもって、音響イメージが湧出される言語的意味の単位「シーニョ」、その各「シーニョ」は更に「差異の二項対立関係」をもって言語的意味を配分され、ラングに格納されている。(トゥルベツコイの主著『音韻論の原理』は彼の死後 1939 年にプラハ言語サークルの論文集第 7 巻として刊行されている。)

① 離散性・デジタル性[15]をもって、機動性ある記号的構成の「シーニョ」

・「シーニョ」の記号性（離散性・デジタル性)『ソシュールの思想』 p 179
・言語音声（シニフィアン）は音素の配列関係によって、時々刻々と変化し得る
・恣意に動く人間の精神機能、「差異の感興」を機動的に（離散性・デジタル性）捕捉
「差異の二項対立関係」を神経伝達系の反応機序として伝える、神経伝達物質の生化学な
動態・官能基の取り込み、on と off に対応させ、その反応を脳内に刻み込む
大脳への刻み、その刻まれた痕跡の母国語集団的構築過程を、言語の体系と想定
（観念性の醸成・丸山圭三郎の翻訳になる関与的・特定共時態[16]）

（関与的とは人間の意識に届き、それが脳機能に記されるところまで至った、その母国語集団における生活世界への解釈の体系、その開始点というべき、「差異の感興」、その集合、的な刻印にまで至ったところの、母国語言語、その体系としてイメージされる、ラングの体系といえよう）　　（関与的変化を引き起こす脳神経伝達物質の関与を想定する）

※官能基：有機化合物の中にある特定の構造を持つ基で、その化合物の特徴的な反応性の原因となる原子や原子団のことである。同じ官能基を持つ化合物は共通する物理的・化学的性質を持つ。また、有機化合物の名称も、その化合物が持っている官能基をもとにしてつけられており、官能基は有機化合物の分類の方法として重要である。(東邦大学)

※音声表象（バロールの連鎖）は、音素の 12 対の示差標識の束としての音素の配列関係としての各「シーニョ」であり、継時的・線状的（刻々と次々に）に「シーニョ」の連なり（連辞）を形成して、ディスクールを構成する。

「聴き手」の「聴取」について：「一つの『言語行為』であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする『解読作業』である。ここで働くのが、ソシュー ルが『配列作用』と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの『存在理由』が

[15] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P203 岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日
[16]　同上　P151　の図参照

ある。[17]」

②言語音（シニフィアン）の性質・音響イメージ

意味と音響イメージ：パロールは・言語音響としてのシニフィアンの連鎖

・「シーニョ」を構成する音素の数、つまり長短は恣意であり、その配列関係も**恣意**

・ディスクール形成時の「シーニョ」区切られ方、**分節**も**恣意**

・「シーニョ」の**結合**上の習慣性、連辞の型としての規律付けは**線状**性の拘束

※ヤコブソンの言及：《唯一、不可分の能記｛シニフィアン（音・筆者加筆)｝がいくつかの価値を含む時は、所記｛シニフィアン（音・筆者加筆)｝の累合があり[18]》

ヤコブソンはこの章の表題・「能記（シニフィアン・音）は果たして線的かにおいて

→恣意性と線状性は相対しつつ共存する関係も、意味の重合もあり、としている。

音響イメージのフレクシビリティ・《音声象徴性》の実現はフレクシブル

※音声象徴性[19]：音・音響イメージ生成（五感の刺激反応系との連動）について、

「音の対立は‥‥（一定の）イメージを暗示する事ができる。」としている。

言語の体系は恣意性と線状性が重合しつつ構築され、

言語表象の場で顕在化されつつ、音響イメージとして柔軟な側面があるとの指摘

※音声象徴性：「それは、固有の表意作用を欠くが、しかしある体系の内にあって互いに対立し、この対立の事実そのものによって表意作用を生み出す事を可能にする単位のようなもの[20]」「どれほど離れていても、この二つの象徴性、一つは音声的、他は意味論的な象徴性は、明らかな相称性を示す。[21]」とされている。(「音」と「意味」の一体性)

7. 聴き手・話し手において同質の言語能力（ランガージュ）稼働が想定される論脈

言語的コミュニュケーションと言語の二つの性質・その同時駆動・重ね合い

①　あらためて恣意性と線状性と

---

[17] chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-30-05.pdf
ソシュールの記号概念と聴き手の立場―記号の図の矢印について（1）p18

[18] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P136　みすず書房
2008 年 11 月 10 日

[19] 同上　P154

[20] 同上　P15

[21] 同上　P19

恣意性と線状性の同時駆動の中で、二つの性質の協働・重合としての言語表象であり、精神運動の恣意性を、身体運動の発声運動上の線状性によって限定しつつの言語表象過程。その場では、言語の記号構成効果（機動性‐離散性・デジタル性）故の協働・重合状態。**言語表象場面（バロールの連鎖場面）**・記号的構成、音素配列による機動性・その揺らぎ

恣意性（自由度・不規則性）を限定する線状性・精神機能の恣意性と発語の線状性の重合（言語音声の記号的な構成）・離散性・デジタル性・(機動的に 12 対の示差標識・音素を刻々と配列する運動)。**「シーニョ」の括り出し過程は自然生物性と社会文化性の重合状態**

②　あらためて「差異の二項対立関係」「差異の感興」「意識に届く」について
意味を括り取るランガージュ：その分節に対応する大脳神経伝達系の反応は、
「差異の感興」の把握・その差異の有無を on/off とする、神経伝達反応の反応

「差異の感興」を「差異の二項対立関係」として括り取る心的動態は、神経伝達物質・その官能基が大脳基質に結合する、その有無を on/of として組み込む動態と想定されよう

（「差異の感興」を「差異の二項対立関係」と言う形式において括り取る動態）
心的に、大脳機能的に、インプットして「シーニョ」として刻み込む、あるいは記憶する。

やがて社会集団的な「シーニョ」の記憶として・言語体系の構築過程・集団的ランガージュ駆動に組み込まれる経過。それは丸山敬三郎の翻訳では「**関与的」な変化を引き起こすという、地質学的時間・母国語集団的な、ある「シーニョ」の浸透・敷衍・言語体系へ格納され得る経過）**

言語音声表象：記号の離散性・デジタル性→on/ off スイッチ・差異関係捕捉の無限性
・大脳内の神経伝達系の反応の機序：差異の感興を on/off スイッチの乗せ得た場合に
・差異の感興を「二項対立の差異の関係」の構成として脳内に刻む反応系として
・脳機能（神経伝達系）へのルート・on/off の神経伝達回路に定着する迄の社会的構築の動態を通して、ラングの体系性が構築され得る。**⇒（人間の意識による関与）関与的**

③　あらためて（非自然性）：二つの恣意性
第一の恣意性：「音（聴覚映像）」と「意味」の一体的に結合した意味の単位「シーニョ」
内部の、「音」と「意味」の絆は全くの自由、何の規則性も自由・恣意な事
第二の恣意性：言語の体系内の「シーニョ」同士の横の関係に見出されるもので、言語の体系内で「シーニョ」間の関係によって配分され言語的な意味、その自由・恣意な事、
※第二の恣意性：「一言語内の記号同士の横の関係（〇→〇→〇→）に見出されるもの

で、個々の辞項のもつ価値がその体系内に共存する他の辞項対立関係からのみ決定されると言う恣意性のこと[22]」と説明されている。「シーニョ」間の結合の恣意性、文法的カテゴリーに見出される結合・

「シーニョ」の布置（概念の配分と大きさ）の恣意性・分節の恣意性

集団的に構築された言語の体系性のベースにある性質が**第二の恣意性**

④　あらためて線状性（身体的運動性・発声の機序に従い、一筋に継時的に進む性質）

「シーニョ」は（潜在的に他の「シーニョ」と結びつき得る）「連辞の型[23]」が認められる→言語音の発声運動上・身体運動性の合理性に由来する

※言語音声（バロール）は 12 対の示差標識の組み合わせ（順列の集合）・その順列の差異が音響イメージを醸成し、各々の音響イメージの差異化を果たす・その「差異の感興」が五感に響きつつ音響イメージを括り出し、意味と一体的構成を成す「シーニョ」を、母国語集団的に産み出す。無意識からの指定＝文化固有性・社会的構築過程を背負う

・・自然生物性と社会文化性の重合

8.　線状性による恣意性の限定と記号的構成の「シーニョ」

①　記号的構成の効果・言語の表象過程の恣意性（非自然性）とその捕捉

ディスクールの要請として、各「シーニョ」の音素の配列関係、音素集合を分節、括り分けつつの「連辞」を進める過程、連辞に際しての**分節の恣意性をもって新たなシニフィアンの生成は音響イメージを揺らしつつの、新たな「差異の二項対立関係」をうましめる、あらたな（意味を生成）する契機たり得る場合において**

その集団的な浸透、敷衍をもって、脳の神経伝達系に入るところまで至りつつ、言語体系の変容・変換が生起し得ると思われる。

その変換：共時変換の様相・言語体系の現段階**（特定共時態・関与的と言う表現）**

→言語の恣意性を線状性が限定しつつ（人間の精神機能と身体運動の協働・同時駆動）

→展開する恣意性を線状性に拘束されつつの音声言語の表象過程を逐次捕捉しつつ、

→（分節の恣意性をも可能にし、そして捕捉するシーニョの記号的構成）

シニフィエ（音）とシニフィアン（意味）を繋ぐ第一の恣意性（意識下）は、双方の一体性・双方向性と同値・言語音の基礎単位である音素（弁別特性の束）の配列関係の構成が音響イメージを揺らす。

---

[22] 丸山圭三郎編『ソシュール小辞典』P86　大修館書店　1985 年 2 月 10 日

[23] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P172 岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日

※音素：ヤコブソンが 12 の弁別特性（示差標識）として分類しており、言語音の差異を識別する事ができる二項対立的に整理された言語音の基礎単位音素

※言語音発声（身体運動）：口蓋・舌・唇・歯茎、咽頭も関与しており、鼻音・閉鎖音・狭窄音なども含み弁別される複雑構造→「二つの音素を同時に発する事は出来ない。だが、いくつかの弁別特質を同時に発する事は、完全に可能である[24]」とはヤコブソンの説明である。（発語運動は、身体運動として意識下で動きつつ（線状性、継時性）も、人間意識の重層性において、意識上的なコントロールに服しかつ身体運動的な無意識的習慣性に従う）

その重なり合い（重合状態）：恣意に展開しつつ・脈絡を追いつつ、習慣性を追いつつ
→象徴性・概念化作用のままに「シーニョ」の生産を実現しているパロールとして
個的ではない、相互作用、集団的な音響イメージの重ね合いを想定する。

② シニフィアン（音・Sound-Image(Signifier)とシニフィエ（意味）の絆）

ⅰ）第一の恣意性に関連して

音響イメージ・五感（視聴覚触覚嗅覚）が動員されるイメージ性「音声象徴性[25]」

「音の対立は、音楽的、色彩的、嗅覚的、触覚的感覚などとの関連を喚起する」ことも示されており、象徴機能と重なるランガージュの駆動様態、（言語音発声時には、弁別特性の内在的価値（たとえば鋭い音素と鈍い音素との対立は、明と暗、とがりとまるみ、細さと太さ、軽さ重さなどのイメージを暗示する事ができる[26]。）

言語の記号的構成の下で：恣意性、線状性の葛藤の中で表象される各「シーニョ」・「辞項」

（言語表象・発声・発音→音素が選ばれ配列され組み立てられつつの「シーニョ」・「辞項」

その構成：（音と意味が一体的に結びついている。第一の恣意性）

シーニョの生成過程：五感にひびく・意識に届く、その差異の感興を

二項対立する差異の関係として恣意に構成し、「シーニョ」として括るランガージュ

言語的意味生成・その恣意・自由な展開を把握可能な→記号的構成

恣意性：時空を超えて展開するイメージ、音声イメージ→観念作用、抽象化作用の醸成

線状性：言語の恣意性を身体運動発声運動の側から制約・限定しシーニョの分節結合へ

「シーニョ」の音と意味の一体性（第一の恣意性）の下で、「音」のゆらぎを引き起こす。

---

[24] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P137　みすず書房 2008 年 11 月 10 日

[25] 同上　P154

[26] 同上　P154

言語の二つの性質の重合としての言語使用、言語的コミュニュケーション過程の中で、言語音声は、ディスクールの要請の下で辞項を生成しつつ揺らぎつつ、意味をも揺らがしつつ「差異の二項対立関係」の揺らがしつつの言語使用の場であろう。

ディクールの要請・あるいは言語的コミュニュケーションの渦中で、コンテクスト（状況）の解釈において、**その時々刻々の「差異の感興」「変容過程」を捕捉可能な言語音声の記号的な構成において、攪拌される言語音声表象、聞き合い、重ね合う、「第二の恣意性」と言う人間の精神機能恣意性が動きあう、集団的な言語使用を想定する。**

まとめ　5から8　ラング（言語）同質のランガージュの重ね合い

★「音と意味についての6章」P102の「シーニョ」の図が示している事として
言語の意味の単位を「シーニョ」として措定するソシュールは、言語音声「音」と言語的意味の一体性、音響イメージが言語的意味を湧出せしめて、言語的意味に繋がるという流れから、「音」と「意味」が一体性をもって人間の意識に届くという流れを示している。
音と意味をつなぐ絆は双方向性の矢印をもって示されており、その事は言語の「意味の側」からも「音の側」からも、人間の意識作用は双方を一体的に受け入れる事を示していると考えられる。

ヤコブソンの定式化によれば、世界中の言語音声は12対の弁別特性（示唆標識）としての音素により構成されている。その音素の線状的な配列関係により、人間の聴覚機能はその配列関係から音響イメージの差異をもって言語的意味に繋ぐといった意識ルートが想定され、その音声言語の記号的構成、記号の生産手段（音素）は全く非関与的であり、その差異をもって意味を湧出せしめる。

★音声言語における記号的構成について：
音素を構成要素として、音素の配列関係の差異をもって、言語的意味に繋がる音響イメージを、聴覚作用及びそれに連動する精神機能の恣意性をもって、言語的意味の単位を聞き分けるところの精神機能、その恣意なる展開を補足可能な記号的構成

離散性・デジタル性[27]（機動性）をもって記号的構成で発声、括り出される
・「シーニョ」の記号性（離散性・デジタル性）『ソシュールの思想』p179
・言語音声（シニフィアン）は音素の配列関係によって、時々刻々と変化し得る
・恣意に動く人間の精神機能、「差異の感興」を機動的に（離散性・デジタル性）捕捉
記号の構成よそたる音素はいかなる意味を抱えず、その配列関係の差異関係、対立関係

[27] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P203 岩波セミナーブックス２　2009年3月13日

によって音響イメージの差異と対応すると理解される。

★この音声言語表象における、その聴き手との関係、母国語集団的な動態を想定する
音声言語の表象側・聴取する側のランガージュの同時駆動・重ね合いを想定する
第一の恣意性・第二の恣意性を駆動する、ランガージュの動態の重ね合い、母国語集団的な動態（「音」と「意味」の重ね合い）を想定する。

後段Ⅰ　レヴィ―ストロースの自然と文化の観点から、ソシュールの言語論を考える（9～15）

9.　言語の恣意性とレヴィ＝ストロースの変換

①　連合の軸と言語の恣意性について

類推作用とレヴィ＝ストロースの（暗喩・換喩・転喩・反転・縮約等）

レヴィ＝ストロースは、「神話論理４巻」の中で、神話ストーリの各部族間の変換について、変換過程を惹起するところの人間の精神機能、その動態として、類推作用を定義づけている。この様態はまさに連合の軸の動態として、様々な連辞の軸を抱えて、群化される「シーニョ群」から選ばれた連辞の配列関係において、ディスクールが構成される。その選ぶ精神機能とは相同と理解される。それは意識上で、時空を超えて飛翔する類推作用とされた、精神運動を進める軸が、連合と軸の稼働形態と考える事ができよう。

レヴィ＝ストロースの神話論理の読み解き

ところで、アメリカ先住民各部族の神話の間で、ストーリーの同一性と差異の関係を追跡しているのが、レヴィ＝ストロースの神話論理（4 巻）である。そのストーリーの細部の展開過程、それぞれ違い方を細部（項）を重ねて眺め検討すると、（項）の中の細部の違い、その展開は、人間の観念作用としての（暗喩・換喩・転喩・反転・縮約等）といった類推の過程との重なりが見出される。

互いのストーリーの違い方、変換の在り様について、先住民の意識、精神機能の展開、そしてそれが人間の精神機能・意識作用の展開課程と同調している事、アメリカ先住民族の類推作用（精神機能）の展開過程と同質な人間の観念作用の動態、精神機能の展開様式が重ね得る事が示されている。そして、神話ストーリーの展開過程、それは言語の恣意性の展開過程に重なる「差異の二項対立関係」の展開過程としての、（暗喩・換喩・転喩・反転・縮約等）が追跡され、確認されているのが、レヴィ―ストロースの「神話論理 4 巻」であり、人間の精神機能・意識活動の動態、それが普遍性を抱えて、普遍的な動態をもって展開している事が示されているといえよう。

ソシュールの言語論の中の恣意なる類推作用の展開課程は、言語の意味、「差異の二項

対立関係」をもって言語的意味を括り取る恣意なる動態である。

そして言語の意味の単位「シーニョ」を格納するラング（言語）の体系性は、「シーニョ」間の横の関係の在りようとして、精神機能の恣意なる展開に同調的であろう。その言語の恣意性の展開過程は、レヴィ=ストロースの神話論理における・変換の諸類型を踏み、時空を超えて「差異の二項対立関係」を構成して変換する動態として、人間の精神機能の動態を踏みつつ展開するところの、それは言語の恣意性とは同調的に展開するとして理解される。レヴィ＝ストロースは「ソシュールの差異に二項対立関係」からの啓示において、この精神の動きを紐解いたわけである。

③　**言語の二つの性質（恣意性と線状性）とレヴィ＝ストロースの変換**

ⅰ）「恣意性」（意識上）次々と言葉「シーニョ」を選ぶ、人間の**類推**・時空を超えて展開する・・・**「恣意に展開する類推作用」：概念化・観念作用の謂い→社会文化性の謂い**

言語の恣意性：人間の精神機能・類推作用として時空を超えて展開する精神機能の動態は、レヴィストロースの神話論理の読み解きにおける、暗喩・換喩・転喩・反転・縮約等のストーリー展開の中の展開過程と同調しており、それは人間の意識の展開課程と同質な、恣意的展開の動態を示していると思われる。

ⅱ）　言語の線状性（意識下）　身体運動・発声運動としての音声言語表象

一筋の時の流れに乗り連ねる、一筋に・次々に→咽頭の構造、舌運動などの影響下、発音発語の習慣的流れを負って進む連辞の軸→それは身体運動・**自然生物性からの、精神機能の恣意なる展開に対する拘束の過程→「結合価」・「連辞の型」を産み出す線状性、その可能態[28]としての「シーニョ」**

10.　言語の二つの性質（恣意性と線状性）と「自然と文化」

①　言語の二つの性質に対応する人間の二軸の意識・精神作用

ⅰ）連合の軸：恣意に展開する**類推作用**、言語の恣意性に係わる、人間の精神機能の軸

ⅱ）連辞の軸：言語の線状性に係わる、人間の身体運動に係わる軸

※連辞の型と結合価について

連辞の型：「単に常套句としての型をさしているのではなく、連合関係（類推作用に対応する―注筆者）におかれたすべての語は、先にも述べたように形態と機能の一体化したシーニョなのですから、潜在的に他のシーニュと結びつき得る〈結合価〉valence を担ってい

[28] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P172 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

て、さまざまな連辞の型を生み出す可能態である[29]」「言語表象にあたり、それぞれの「シーニョ」がその時に適切、妥当する他の「シーニョ」を選び、結合価をもって結びきつつ、一筋の糸として連ねて（線状性）、ラング（言語）をディスクールの要請に適うべく活動化する。」

※結合価：各「シーニョ」は言語表象場面で他の「シーニョ」と結びつき得る
その可能性、地位を担って、ラングの体系内に格納されている

②　言語表象側と聞き取る側の意識：

言語表象側：類推的に意識的な働きでラングの宝庫から「シーニョ」を選び、同時に身体運動（発声運動）を司る無意識的な意識、発音上の習慣性（連続発音のしやすさ等、身体運動性からの習慣性）をもって言語音発声を進める。（恣意性と線状性の重合）

※**言語音発声時には**、音素の弁別特性の内在的価値が指摘され、「鋭い音素と鈍い音素の対立・明と暗・とがりとまるみ・細さと太さ・軽さ重さ等イメージも影響がある」との音韻論の（ヤコブソン）[30]指摘もあり、音響イメージと言語的意味との絆、そうした概念生成や象徴機能の動きには、多方位性を指摘せざるを得ないとも思われる。

言語表象の場の人間の意識：線状性（意識下）と恣意性（意識上）の連動

言語の二つの性質は、言語表象の場面で同時的に駆動し、その葛藤をもって同時駆動
恣意性を線状性が限定しつつ、重合する言語コミュニュケーションの過程
人間の意識下、上の動き、複層的構造→身体運動性と精神運動の葛藤
その揺れ・揺らぎを、刻々と表象可能な構成としての言語記号（音素の配列）

言語を聞き取る側の意識：音素の配列関係・線状的に習慣的に追いかけつつ、音響イメージにおいて、意味との絆づけ「そして「聴き手」の「聴取」もまた一つの「言語行為」であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする「解読作業」である。ここで働くのが、ソシュー ルが「配列作用」と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの「存在理由」がある。[31]」

③（言語的コミュニュケーションと（恣意性と線状性）の重ね合い・ディスクールへ）
ｉ）言語の二つ性質と人間の意識の二つの軸、
（言語を繰る意識、恣意なる展開（意識上）を、線状性（意識下）が限定しつつ、

---

[29]　同上

[30] ローマン・ヤコブソン　花輪光訳『音と意味についての 6 章』P154　みすず書房　2008 年 11 月 10 日

[31]　https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-30-05.pdf P96

（恣意性の拡散性を線状性が限定→聞き合い・新たな言語的意味を括り出す構造）

人間の類推作用の自由度恣意性を刻々表象し捕捉する記号形式の機能性

→言語の表象過程、集団的な言語使用（コミュニュケーション）、その時間経過

ⅱ）　ランガージュの、言語表象側、受意側の双方的な駆動を想定する

言語的コミュニュケーションの場の力動性；互いの言語的意味の重ね合い

ランガージュの重ね合わせ・双方的・集団的なランガージュの駆動

言語的コミュニュケーション、ディスクール（discours-仏）の伝達過程：

言語表象側・受け手側：聞き合い、重ね合う、交互作用の進行、→言語を駆動する精神機能（ランガージュ）の、表象側と聞き取る側双方向的な重ね合わせ

双方向的ランガージュの駆動→コミュニュケーションの達成の経過（コードが介在）

各母国語集団的に・コミュニュケーションに係わる共通のコード・ラングの体系の存在

④精神の複層性（時間概念そして無意識を抱える人間・重層的な精神構造）

ⅰ）　時間概念獲得と意識構造：心理的複層性、潜在意識（フロイドユング）

人類の社会文化性の獲得は時間概念の獲得とは双方向的、

それは自然生物性からの移行・社会文化性への移行と重なる

人間における時間の観念、時の流れを人間に知らしめ、気付きを醸成するのは

→ずれ、差異故の感興、差異への気付きであろう

→恣意に展開する、時空を超えて恣意に展開する精神機能

その流れ・動態、恣意性を逐次表象可能なのが記号的構成（言語音声の配列関係）

記憶的な時間・人間の意識の複層性（無意識を抱える）・記憶の装置としてのラング

ⅱ）ラング（言語）の体系性と「シーニョ」

・記憶の倉庫・「シーニョ」の格納庫・言語の体系構築→心的複層性 の構築

意識の階層性（無意識・意識下・その階層性）の現出。

「シーニョ」の格納庫＝ラングの体系・ラング内に類推的秩序で格納される「シーニョ」

「シーニョ」間の差異の二項対立関係・その網の目としてのラングの体系性

大脳の神経伝達機序（on/off）へ取り込まれている。（関与的と表現されている）

ラングの体系性：「存在するものは、常に音的差異によって作り出された価値の対立だけなのだ。（‥‥）すべては差異に帰着し、すべては**群化**に帰着する。[32]」

[32] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P167 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

群化とは：再掲（ｐ９参照）類推的秩序において、互いの差異によって〈群〉をなす・「一群にあつめること」（P169）

連辞の軸：結合価を担ってラングに格納されている「シーニョ」

「連合群の内部で何を変えれば単位（意味の）を差異化し得るという事を、我々は知っている。だから**連辞**が作り出される瞬間には連合群が介入しているのであって、連合群無しには**連辞**は形成されないと言える[33]」　（連合と連辞の同時駆動の様態）

ラングの体系：「シーニョ」間の関係の網の目・
差異の関係（連辞は連合群無しに形成されない・読むの 168)、

ⅲ）ラングをディスクールの生成へと活動化するものは何か

ラングのコード：「ソシュールは言語の全体にわたるコードを取り上げたが、勿論、記号は単独で意味を持つものでなく、互いに関連させて理解される時のみ、意味を持つことを強調している。テクストの生成や解釈がコードの存在やコミュニケーションのための慣例に依存することを強調したのは、もう一人の言語学者であり構造主義者のローマン・ヤコブソンである((Jakobson 1971))。記号の意味は、それが置かれているコードに依存するので、コードは、記号が意味を持つ枠組を与える。」

「もし記号表現とその記号内容の関係が恣意的であるならば、記号の慣例的な意味を理解するには、適当な集合の慣例をよく知っていなければならないというのは明白である。」これらは**各母国語言語の体系は社会的コード**であることを語っている。
http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/japanese/sem08_japanese.html
再考：そして「聴き手」の「聴取」もまた一つの「言語行為」であり、それはこの根底的要請に手さぐりで応えようとする「解読作業」である。ここで働くのが、ソシュー ルが「配列作用」と呼んだ、ラングのメカニズムであり、そこにラングなるシステムの「存在理由」がある。[34]」

言語的コミュニュケーションは、ランガージュの双方向的駆動状態において、ラング（言語）の体系という社会的なコードが、音声言語における線状性の拘束下にあって「シーニョ」の配列関係を成立せしめ、その社会的な慣例・慣習としての、意味生成における「型」を実現する言語の体系であり、これがラング（言語）をディスクールとして活動化せしめるところの社会的な体系【ラングの体系】として想定されよう。

33　同上 P168

34　https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/europe/pdf/seur-30-05.pdf　P96

⑤　「シーニョ」の格納庫ラング：（記憶の倉庫）の体系

記憶装置としての「シーニョ」、その倉庫・格納庫としてのラング・

ラング（言語）の体系は、「シーニョ」間の「差異の二項対立関係」の網の目

→ラング（言語）の体系＝「シーニョ」の「音と意味」の差異関係・非実体性、言語表象者の指向対象：恣意に構成する「差異の二項対立関係」をもって括り取られ、言語的意味「シーニョ」の間の差異の関係の網の目において意味を配分するラング（言語）の体系

ラングの体系性は母国語集団の構成員の意識に届く（社会制度的に機能している）

→言語の体系の母国語集団的な構築過程→人類集団の社会文化の深まり

言語のコードは集団内の意味の共有に係わる各「シーニョ」間の、線状的配列関係を規定

→言語表象側のディスクールの実践を言語的意味として聴き手に共有せしめる装置・

かつ、それら「シーニョ」を類推的に選択しつつディスクールへと繋ぎ結合する・その機序において群化して格納する体系

この体系は、言語音の基本単位音素の配列に係わる、次の「シーニョ」を恣意に類推的に選び出して、線状的に繋ぐ、社会的な慣例慣習を体現しており、そのコードの集団的な共有関係が母国語集団的に文化の状態へと移行する経過とともに、言語的コミュニュケーションの広がりと深まり、社会文化性を構築しつつの歴史経過を想定する。

参照）※「語る主体の意識・意識に到達する」：意識に到達する(読むの　237-8)：語る主体の意識の問題(同 105)：意識に達する（同 155.201)：「意識が知覚するもの」(同 167)

11. 類推的変化（関与的変化）について

①**精神機能（脳機能）と言語の音声記号的構成：**

差異の感興を抱く⇒意識に届く⇒記号的構成（on/off に変換可能）の言語表象へ

ｉ)「語る主体の意識・意識に到達する」の解釈を巡って

・意識の上での類推的変化（関与的変化）＝変化前の伝承形と新形が共存‥脳機能膨張

・意識の下での音声変化（非関与変化）＝変化前の伝承系は消え新形に置き換わる

語る主体の意識→（音声変化だけでなく）類推的変化を経過せずには意識に到達しない

→→あるいは類推的変化を引き起こしている時にこそ、意識に到達する

再掲)「差異の感興」と言う心的動態は、「差異の二項対立関係」を構成して差異を括り出す神経伝達系の反応、その機序は神経伝達物質の生化学な動態（官能基の移動）

その官能基の取り込み、on と off して、その移動、反応を脳内に刻み込む**（関与的）動態**

※官能基：有機化合物の中にある特定の構造を持つ基で、その化合物の特徴的な反応性の原因となる原子や原子団のことである。同じ官能基を持つ化合物は共通する物理的・化学的性質を持つ。また、有機化合物の名称も、その化合物が持っている官能基をもとにしてつけられており、官能基は有機化合物の分類の方法として重要である。(東邦大学)

ⅱ）意識の上での類推的変化（関与的変化）・変化前の伝承形と新形が共存する
新しい「シーニョ」意味の創出は、言語の体系を揺らす・言語の体系の変換へと至り得る
（「シーニョ」間の「差異の二項対立関係を揺らす」関与的変化）

差異への気付き＝「差異の感興」＝意識に届く事態が、ラングの体系を揺らす
記憶的な時間・時間の差異への気づきは、時間概念を産ましめる
記憶の装置「シーニョ」をラングの体系へ格納する（「群化」を果たす）

ⅲ）時間概念獲得と意識構造（心理的複層性、潜在意識・・フロイド・ユング）
社会文化性の獲得は時間概念の獲得と共に開始・それが自然生物性からの移行過程
時間の観念、時の流れへの気付き・差異への気付きの記憶装置である「シーニョ」

② 類推的変化と関与的変化

・「ラング」「パロール」の相互依存性：読むの p85.86
「ラング」は「シーニョ」の格納庫・シーニョ間の差異関係、その網の目としての体系
「シーニョ」が他の「シーニョ」と連なり連続体として流通、汎用＝辞項（流通単位）が形成される。その過程で音声変化から関与的変化へと動いた場合に、言語の構造の再布置化がひきおこされる。(関与的変化と言語の構造（体系の変化）を伴う。）脳内への input

ⅰ）既存の辞項群からの連想作用によって、ある辞項の傍にもう一つの新しい辞項を創り出す事(読む 86)⇒それが主体の意志が関与する事（連想作用の関与）
ⅱ）その持続可能な刻印を生み出す迄くり返されたもの→ラングの体系内へ（関与的変化）を引き起こし、大脳神経伝達系の反応機序として形成され・定着する。そのためには身体動作的・反射的・習慣的に無意識で動く身体運動からの要請のみではない、主体の意識にコントロールされて動く、類推作用の働きが重なり、その意識の流れが神経伝達系の反応として、大脳言語野に（刻印される経過）に引き続き得て、その経過が大脳神経伝達系に刻印を残す＝[反応機序として組み込まれる]⇒意識に届く（関与的変化）に至るという事として想定される。
ラングの体系は、音声変化から構造の再布置化へ（それが同時に関与的変化を引き起こす場合には、新たな「シーニョ」が創出され得る。

その新たな「シーニョ」は、意識に届く状態において、ラング内（脳機能内）に取り込まれ引き続く経過が、ラング内の群化されて格納されている「シーニョ」間関係の揺らぎを生じて、やがてラング（言語体系）の変換へとの動態が開始すると思われる

12.　新しい意味の創出過程とレヴィ＝ストロースの変換

①　新しい言語の意味の単位「シーニョ」の創出過程について

「シーニョ」は「言語音声（シニフィエ)」＋「言語的意味（シニフィアン)」

「シーニョ」は：線状性の下で形相性を成す事も有り、音の揺らぎを現出する

→「シーニョ」同士の「差異の二項対立関係」「新しい二項対立の創出」

→「シーニョ」間の新たな「差異の二項対立関係」から新たな意味創出

「新たな差異の関係」において、新たな言語的意味の範囲は恣意に括り取られる

⇒関係的概念である言語的意味（非実体、非現前性）→「おしひろげうちひしがれる」という形相性をなす「シーニョ」それに伴う意味の変化・揺れが想定される。

②　言語的コミュニュケーション過程（話し手・聴き手のランガージュの重ね合い）

人間の精神機能（脳機能）の動きと言語の音声記号的構成と新しい意味の創出過程

「音」と「意味」の交錯・恣意性と線状性の同時駆動の渦中

人間の意識の動きを、逐次表象可能な言語における記号的構成

各「シーニョ」の結合（分節・結合)・その場の揺れ

→意識に届く・関与的変化に落ちる時

それは：新しい「シーニョ」の創出になり得る場合に、「シーニョ」間関係の網の目としての言語の体系に、新たな「シーニョ」による体系の揺らぎを生じると想定される。音と意味の間の絆、その複層的な重合的な恣意的な展開過程、その中で新しい「シーニョ」が、意味の揺らぎの中で創出される場合には、ラングの体系の揺れ、変換を生じ、その集団的な浸透敷衍が言語の変換として共時変換をきたす。

音の揺らぎから意味の揺らぎへと流れた場合に、類推的変化をもきたすと想定される。

③　類推的変化とレヴィ＝ストロースの『神話論理』における変換について

説明：類推的変化とレヴィストロースの変換

その地質学的な時間の流れにおいて、各母国語言語の体系の深化・拡大・通時変換 そして共時変換への動き、その蓄積過程が想定されるであろう。

小田亮の真正な社会の関連から

言語的意味の創出過程について、ある言語的意味を括り出す「差異の二項対立関係」が母

国語集団的に浸透し・敷衍する過程、その集団的な浸透が進む社会状態について、それは「差異の二項対立関係』の集団的妥当性と言うべきか、「母国語集団を取り巻く外界・実質（substance）の様態・(天候・生存条件の在り様）に影響されつつ進行し変化し得ると思われ、集団構成員の意識世界（forme）の広がり、その総体を反映するであろうから、人間の言語能力（ランガージュ）の「言語の恣意性」に重なる、人間の恣意なる意識作用の流れ、その「類推的変化」の追跡過程が想定される。

その展開過程、ソシュールの言語論的には、「差異の二項対立関係」において、二項をどう構成するのか、その切り取り方に係る、そこに働く自由・恣意なる、人間の精神機能の飛翔（類推の在り様としての暗喩・換喩・転喩などとされている)、その動態の集合としてイメージされるところの、レヴィストロースの変換過程と重なる、言語の恣意性の在り様として、想定されよう。

言語の恣意性の展開過程・人間の精神機能の飛翔・その動態・その地質学的な時間の流れにおいて、各母国語言語の体系の深化・拡大・通時変換・そして共時変換への動き、その蓄積過程が想定されるであろう。

13. 言語体系の社会的構築（共時変換と通時変換）

ラング（言語)：「シーニョ（言語の意味の単位)」が類推的秩序で格納されている宝庫
「シーニョ」間の「差異の二項対立関係」の網の目と表現されている。

① 「シーニョ」の音声（シニフィエ）の形相性について

意味と音が一体的に結びついた音響イメージ：
シーニョ)：音声は線状性の要請下「おしひろげられ、うちひしがれつつ」の音声の
変容→それまでの意味を括り出す「二項対立関係」をゆれ動かす

・音と意味の絆、「シーニョ」の足場「差異の二項対立関係」を変化させ得る
・音響イメージ（聴覚・視覚・触覚等五感の関与するイメージ）の変容へ、
意味の揺らぎへと動き得る

音声（シニフィアン）の「おしひろげられうちひしがれる」変容
→言語的意味の変容（言語音声と意味の変容・揺らぎ＝「形相性」

②「シーニョ」の音声（シニフィイエ）の揺らぎ→意味（シニフィアン）の揺らぎ
→「シーニョ」間「差異の二項対立関係」の揺らぎ（ラングの体系の再布置化へ）
→その網の目（ラングの体系）全体へ波及→通時変換、共時変換へ

（大脳の神経伝達系に差異の感興が組み込まれる→言語体系の変換を生じる）

集団的なある「シーニョ」の使用→継続と消失→通時変換、共時変換へ
それら音声変化が、音声イメージ（言語的意味）の変化として再布置化
→「新たな差異の二項対立関係」の創出、「シーニョ」「辞項」の創出
→ラングの体系内の揺らぎ、変容→共時変換へ　（通時変換として消滅）

③　ラングとディスクールの間：集団表象と個人表象

ⅰ）「ラングがディスクールとして活動化される[35]」その、せしむるものは何か？
人間意識の重層性と、その中の生物原理　（個人表象と集団表象）
（共生生命体の 30 億年）リン・マーギュリス：「自己維持と自己再生産[36]」
太古の集団表象の源泉・生命危機と生殖願望

ディスクールと「ラング」をつなぐもの（丸山読むの 168.169.170.273）は何か？
「シーニョ」間の絆の形成・あるいは関係づけに関連して

偶然の産物・自然淘汰＆生命原理≒生命原理（自己維持・保存と自己再生産・複製衝動）
自然淘汰にせよ・共生関係形成にせよ→結果論・偶然残り得た形質・構造
人類の大脳神経伝達物質の生化学的反応機序を抱くところの、偶然の事象の重なり
脳組織の活動態に結果として残った on/off→その社会集団的構築過程
→言語の社会的構築→その展開過程、構築過程の通時・共時変換

ⅱ）　「連辞の軸（無意識）」による「連辞の型[37]」＝発語上の習慣（身体運動性）
「連合関係におかれたすべての語（ラングの格納庫におかれた）は、
形態（音‐筆者注）と機能（意味を示す‐筆者注）の一体化した「シーニョ」
潜在的に他の「シーニョ」と結びつき得る〈結合価[38]〉（valence）を担っている。
→さまざまな連辞の型を生み出す可能態でもある」読む 172
→規則の体系としてのラング（連辞と連合の軸の重なり合い）の中で
恣意性と線状性の同時駆動・同時協働限定の中で　文法的の秩序を形成する
（**恣意性を線状性が限定**）→規則性のベースは線状性からの限定
生物性は消える事の無い永遠の響き（線状性）・しかし言語音声発声上の制約が存在

自然生物性から社会文化性への永遠の移行過程→恣意性と線状性の重なり・葛藤状態

---

[35] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P170 岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日
[36] リン・マーギュリス 中村桂子訳『共生生命体の 30 億年』 p 130　2000 年 8 月 28 日
[37] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P172 岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日
[38] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P172　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日

生命体（自己維持と自己複製）・自然生物性＋社会文化性（生きる事は交流する事）

→双方が重なり合うメッセージが、ディスクールとして活動化へと至り得る

④　ラングの社会的構築過程を想定する

シーニョの創出・意識に届く・変換作用・社会文化性へ

音素の配列・順列関係の構築過程を想定する

意識に届く：意識の上での類推的変化（関与的変化）には変化前の伝承形と新形が共存

意識の下での音声変化（非関与変化）には変化前の伝承系は消え新形のみ

音素の配列関係の揺れは、非関与的であろう

（音の揺らぎ・聴覚機能等の感覚器官が受け取る刺激的な差異、その感興、その記憶）

差異の感興を抱く⇒意識に届く⇒（音声変化だけでなく）類推的変化を経過せずには意識に到達しない、類推的変化を引き起こしている時にこそ、意識に到達する（関与的変化）

音響イメージと音素配列関係の対応関係は記憶されず、非関与的

しかし；集団的なある「シーニョ」の使用→継続と消失→通時変換、共時変換へ至り得る

それら音声変化が、音声イメージ（言語的意味）の変化として再布置され

→「新たな差異の二項対立関係」の創出、「シーニョ」「辞項」の創出

（大脳の神経伝達系に差異の感興が組み込まれる→言語体系の変換を生じる・関与的）

「ラングがディスクールとして活動化される[39]」その、せしむるものは何か？

人間意識の重層性と、その中の生物原理　（個的表象と集団表象）

（共生生命体の 30 億年）リン・マーギュリス：「自己維持と自己再生産[40]」

太古そして現在も：集団表象の源泉・生命危機と生殖願望　‥自然生物性

社会文化性の拡大とともに社会文化的な要求が重なる

まとめ 9～13　人間の意識と言語の二つの性質とディスクール（言説）を

レヴィ＝ストロースの「自然生物から社会文化への移行」について

「言語の恣意性」「神話の中の変換過程・転喩暗喩反転等」において検討する。

言語の二つの性質は、人間の言語を繰る意識の二つに対応している。

（連合の軸―意識上・精神機能に係わり、類推作用・時空を超えて恣意・自由に展開）

（連辞の軸ー意識下・身体運動に係わり、一筋の糸のように言語音を連ねる）

---

[39] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P170 岩波セミナーブックス２　2009 年 3 月 13 日

[40] リン・マーギュリス 中村桂子訳『共生生命体の 30 億年』 p 130　2000 年 8 月 28 日

言語表象の場の人間の意識：線状性（意識下）と恣意性（意識上）の連動

二つの性質は、言語表象の場面で同時に駆動してすすむ、葛藤状態
：恣意性を線状性が限定しつつ、言語音声の表象がすすむ
人間の意識下上の動き、複層構造（潜在意識）→身体運動性と精神運動の葛藤

言語的コミュニュケーション：聞き合い・聴き手・話し手のランガージュの重ね合い
相互的ランガージュの駆動→線状的に音響を拾い出す相互のランガージュ言語活動
コミュニュケーションの達成の経過（コードが介在）
→その動態・恣意的な展開を逐次表象可能なのが記号的構成

シーニョ：12 対の音素の示差標識の組み合わせ（ヤコブソンの定式化）音の配列集合
言語の意味の単位（音響イメージが意味を含意する）。
潜在的に他のシーニュと結びつき得る**〈結合価〉valence を担っていて、**
さまざまな連辞の型を生み出す可能態。（連辞の軸による）

記憶的な時間・人間の意識の複層性（無意識を抱える）・記憶の装置としてのラング
ラングの体系性は母国語集団の構成員の「意識に届いた」時に体系の変換の契機たり得る
母国語集団の社会制度的に機能する言語としては：
ディスクールの実践を言語の意味として聴き手と共有できることが前提

※ラングは「シーニョ」を連合の軸による「群化」をもって格納している「宝庫」・（記憶の倉庫）ラングの体系：「シーニョ」間の関係の網の目として、互いの差異の関係が、連合軸、類推作用の軸で「群化」されている構造、脳内或いは心的に構築されている。
（言語的意味は互いの意味の単位「シーニョ」間の関係において配分される意味）

人間の意識と言語の二つの性質とディスクール（言説）
言語の二つの性質は、人間の言語を繰る意識の二つに対応している。
（連合の軸―意識上・精神機能に係わり、類推作用・時空を超えて恣意・自由に展開）
（連辞の軸ー意識下・身体運動に係わり、一筋の糸のように言語音を連ねる）

言語表象の場の人間の意識：線状性（意識下）と恣意性（意識上）の連動
二つの性質は、言語表象の場面で同時に駆動してすすむ、葛藤状態
：恣意性を線状性が限定しつつ、言語音声の表象がすすむ
人間の意識下上の動き、複層構造（潜在意識）→身体運動性と精神運動の葛藤

言語的コミュニュケーション：聞き合い・聴き手・話し手のランガージュの重ね合い
　相互的ランガージュの駆動→線状的に音響を拾い出す相互のランガージュ言語活動
　コミュニュケーションの達成の経過（コードが介在）
　　→その動態・恣意的な展開を逐次表象可能なのが記号的構成

シーニョ：12 対の音素の示差標識の組み合わせ（ヤコブソンの定式化）音の配列集合
　　言語の意味の単位（音響イメージ＋意味）。
　　潜在的に他のシーニュと結びつき得る**〈結合価〉valence を担っていて、**
　　さまざまな連辞の型を生み出す可能態。（連辞の軸による）

記憶的な時間・人間の意識の複層性（無意識を抱える）・記憶の装置としてのラング
ラングの体系性は母国語集団の構成員の「意識に届いた」時に体系の変換の契機たり得る
　母国語集団の社会制度的に機能する言語としては：
ディスクールの実践を言語の意味として聴き手と共有できることが前提
※ラングは「シーニョ」を連合の軸による「群化」をもって格納している「宝庫」・（記憶の倉庫）ラングの体系：「シーニョ」間の関係の網の目として、互いの差異の関係が、連合軸、類推作用の軸で「群化」されている構造、脳内或いは心的に構築されている。
　　（言語的意味は互いの意味の単位「シーニョ」間の関係において配分される意味）

後段Ⅱ（言語の社会的構築過程「言語は本質的に【対話性】を持つ」）（15～17）

14．　文字使用について

5000 年ほど前のシュメール文字使用、その文化が読み解かれている。

文字使用は、音声言語が、音として寸時に消えゆくのに対し、文字記録は音声言語のコミュニュケーションの時間性、空間性を無限大に引き延ばし、人間の記憶の時空を超えて記録し伝播させる、文字文化の世界がひらけた。

文字言語表象は、時空を超えての、言語集団全体とのランガージュの重ね合わせ
一つの言語表象を、時空を超えて聞き合い、重ね合う事ができる言語使用の水準が現出

エクリチュール（書き言葉）・意味形成生成の運動過程・創出過程・象徴機能の質的拡大

近代的自我への道のり：文字文化・記録される文化（書き手と読み手のランガージュの重ね合い関係）聞き合い重ね合い、意味受容の過程・他者への気付き・自他の差異に気付く、この事態は「近代的自我概念」への前提であろう。

文字使用は、音声言語が、音として寸時で消えゆく音声表象に対して、言語表象を記録
　　→人間の記憶力、その時間性・空間性の延長・表象の話し手聞き手の拡大

言語表象、コミュニュケーションの時間性、空間性を無限大に引き延ばす機能
文字の発見と人間の記憶の時空を超えた伝播・文字文化の世界

文字の使用により、人間の記憶・思考が長い時を経つつ伝達され得る。→時空を超え、複数多重層の応答がなされ、さまざまな思考・思想・ノウハウ（技術）が伝達される、コミュニュケーション過程。文字による言説は作者の意図を超えて、さまざまに受け取られ得る形式が成立

「時間と空間を対立させつつ、空間は時間へ、時間は空間へと、時空をまたいで（？）相互に位置をずらし（deplacemen)を行い、変形させていくテクスト操作であり、移動する動きである。バロールは発語主体を維持するから同一性の論理が働く。文脈から離れて移動していくエクリチュール（文字）は発話主体を引き裂き二重化していく。自ら変容していく。**(バロールとディスクールの対比)**

文字言語表象は、時空を超えての、言語集団全体とのランガージュの重ね合わせ
一つの言語表象を、時空を超えて聞き合い、重ね合う事ができる言語使用の水準が現出
（文字の使用、エクリチュール（書き言葉）は意味生成の運動過程・創出過程・象徴機能の質的拡大をもたらしたと思われる・しかし話者の側からの即時的対応関係、重ね合いは無いと言えようが、話者・聴き手については、無限に拡大し得る）

15.　近代的自我作用への道のり（フロイド・ユング・ソシュールの無意識からの指定）

① 集団表象と自己表象の境界線の誕生

ポリフォニー的言語使用（ランガージュの双方向的駆動と交互作用・重ね合い）
↓　血縁的家庭生活（小集団性）・・聞き合い、重ね合う、言語的意味の醸成
社会集団内生活（大集団性）・・集団表象と個人表象の一体性
聞き合い・重ね合い・差異の二項対立関係の構成の揺らぎ合い

集団表象としての各神話・民話・石碑等の文言は、文字文化・記録される文化（書き手と読み手のランガージュの重ね合い関係）を抱えており、聞き合い、重ね合い、意味受容の過程・他者への気付き・自他の差異に気付く契機を抱える→近代的自我概念への前提

② 現代思想：バプチンの対話原理・クリステヴァの間テクスト性・やまだようこの「対話的モデル生成法」に関連して。(質的心理学研究 7 号/2008/No.7/21-42・多声テクスト間の生成的対話とネットワークモデルー「対話的モデル生成法」の理論的基礎に関連して（やまだようこ　京都大学大学院教育学研究科）から

言語表出と言語の意味理解、その交錯たる対話性・そのポリフォニー性、聞き合い、重ね合う、意味の交換過程についての言述。

伝統哲学の同一性原理に対して、「他者」「差異」「生成」を重視する現代哲学の方向性と共通すると指摘して、やまだようこは差異と生成としてまとめようとしている。
※ソシュールにおける言語表象への言及は、自由に創造し展開するのではなく、あるいは心的能力（想像力）ではなく、先行する（言葉的・歴史的）事実に依拠しており、言語的意味の変容は名前の書き変え、そして動機、目的の変転としている。

言語的意味は他の言語的意味からのプリコラージュであるという論脈：
時空を超えた言語使用、言語表象をもたらした文字使用の効果、意味は大きい。
（レヴィ＝ストロースのプリコラージュは、類推活動の一様態であろう）

16. フランス現代思想の諸傾向と言語使用の構造とを検討する
ランガージュの双方向的駆動を前提にして、現代思想の諸傾向を考える
「プラトン/アリストテレス以来、西洋哲学は、イデアや実体、根源など、永遠に変わる事が無い普遍性と自己統一性を存在の原型とみてきた。[41]」やまだようこ

① バプチンに関連して
バプチン（1895 年 11 月 17 日 - 1975 年 3 月 7 日）：ロシアの哲学者、思想家、文芸批評家、記号論者。対話理論・ポリフォニー論の創始者。記号論のタルトゥー学派の祖。
バプチンの対話原理を基にして、対話の中の言語使用について、**ポリフォニー**と言う観点から考察する視点は、ランガージュの双方向的な駆動をもって、言語体系の構築を眺めようとする私の視点との共通性があり得る。

「自己意識を組織する最も重要な行為は，他者の意識（汝）との関係によって規定される。」（バフチン，1988, p.250）差異と生成がバプチンの対話原理の基礎
（ソ連邦においてドストエフスキーの文学世界の中の人物像について、独立的人格性を論じて、ポリフォニー性を論じた）とされるバプチンにおいて、その「差異を生成につなげる」という観点は、言語的意味の生成過程と共通的。）

バプチンの対話原理における自己

---

[41] 多声テクスト間の精鋭的対話とネットワークモデル「対話的モデル生成法」の理論的基礎　（質的心理学研究　題 7 号/2008/No.7/21-42）
http://www.jaqp.jp/JJQPfull/JJQP_07_2008_021-042_full.pdf　2021/06/07

1．自己は他者を媒介にし、他者との関係性に深く根差す社会的存在
　「自己は単一で同一性を持つ独立した個人」に対して
2．自己が言葉を発するとは、自己のなかの他者の言葉と対話する事である。
3．「自己のなかに住みつき、内的論争をかわす他者のことば」
　「自己の発話の聴衆となる明示されない他者」
4、「コトバの対話性と多声性」バブチンの後期は、「テクスト間」の対話

この 4 の観点は、対話するのは、もはや「自己と他者」でもなければ、「内なる自己」や「内なる他者」でもない。言葉と言うものが本質的に「対話性」を持つと考えられる。言葉の対話性は、「分裂した多声性（ポリフォニー）」を持ち、「同じ一つの言葉を互いに背反し合う様々な声を通して実現する」ことになる。

ポリフォニー性に関連して：相互テクスト性（intertextualité）とは、生起している状況（コンテクスト con-text）において決定される
※コンテクスト：あるテクストを解釈するために不可欠なさまざまなテクストの総体〈文脈〉〈脈絡〉〈状況〉などと訳される。言語理論、文学理論、解釈学などの領域におけるキー・コンセプトの一つ。テクストは相互テクスト性（intertextualité）の作用を常に受けている。（どんなテクストもコンテクストを無視しては解釈できないという自明な原理には、所与のテクストに対するコンテクストを過不足なく限定するいかなる客観的基準もない、というパラドクスがともなう。）

コンテクストに関連して：この問題に言語論的「転回」をもたらしたのは、スペルベルとウィルソンの有意性理論。（relevance theory. 関連性理論ともいう）彼らはグライス理論を継承しながらも、コンテクストに関する伝統的見地を転倒した。コンテクストは客観的な所与ではなくて、会話の場に自己組織されるものだという見地である」（菅野［1998：558］）

この考え方は、ミハイル・バフチンの「対話原理（dialogisme）」や「ポリフォニー」の概念を継承するものだが、ソシュールのアナグラム研究やフロイト＝ラカンの精神分析からの刺衝も受けている」（大井［2004：339］）

状況から受け身的にコンテクストが生成するのではなく、会話の場で力動的に生成する・「意味をその物質的側面から出発して、それを忘却せずに考えるときに、言語現象が立ち現れてくる姿である。いい換えれば、言語的な意味の世界はそれを産み出した発話者や作家の主観や意図に一意的に従属するものではないとする基本的な立場が含意されている。」　http://tanemura.la.coocan.jp/re3_index/4T/te_text.html

私はランガージュの重ね合い、揺らしあいといった、言語使用・言語表象過程を想定するのだが、言語的コミュニュケーション過程は、コンテクストを自己組織化する経過・過程、そのものであろう。コンテクストを自己組織化するとは、「時間・空間の差異の気付き」と相関的であろうとおもわれる。

② やまだようこ「多声テクスト間の生成的対話」について

「第 1 に，対話概念を多声テクスト間の対に拡張することである。第 2 に，差異を肯定し，必ずしも否定や対立にならない「両行」する対話を考えることである。第 3 に，一次元の時間順序による因果関係ではなく，出来事の関係性を問うていくことである。第 4 に，差異化，遅延，隔たり，断片化など空間的・時間的に「はなれる」働きと，分化，引用，リンク，トランスクルージョンなどはなれたものを「むすぶ」働きによって，「生成」機能が生まれるしくみに注目することである。」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaqp/7/1/7_21/_pdf/-char/ja

参）質的心理学研究 第 注 7 号／2008／No.7／21-42 多声テクスト間の生成的対話とネットークモデル ―「対話的モデル生成法」の理論的基礎　やまだようこ

（やまだは【対話における「生成」】を論じ、バプチンの対話原理・ドルーズの差異と反復（1968）・デリダの「差延」・クリステヴァの間テクスト性、ポリローグを、自身の「生成的対話」モデルとの関連で纏めている。）

③ ドルースの生成；「対立するものを弁証的に止揚するとか、違いや差異が否定されずに排除されずに、吸収される」：やまだようこの言葉としては「ドゥルーズの『否定や排除なき差異』『差異有るものの肯定的な隔たり』の概念では、差異や隔たりは共に肯定され、差異化・分化(differentiation)として生成される。闘争、否定、排除と言う概念自体が、無化され徹底して取り除かれ得る所が興味深いのである。」→**生成と両行（やまだの概念）**

④ クリステヴァの le symbolique＝ル・サンボリックと（le semiotique＝ル・セミオティック）：間主観性（間テクスト性は、テクストの意味を他のテクストとの関連によって見つけ出すことである。コトバンク）この論点は、一つの概念形成に係わり、複数の思考、言語使用が関与すると言う人間の意識作用が含意されていると理解できよう。

（クリステヴァは、対話を多声的に拡張した「ポリローグ」(polylogue)という新語をつくったのだが、「ポリローグ」は、①ル・セミオテック（原記号態：リズム、イントネーションなど言葉として表現されないもの）と②ル・サンボリック（記号象徴態；言語において記号・意味のレベルにあるもの）の衝突からうまれるとしている。そして詩の定義と

して、ことば自体を無化し、論理を崩し、「うたう」働きによって共感的に交差する先鋭的テクストとしている。）

これは、ソシュールの言語の線状性と恣意性の衝突とも取れ得る、言語表象過程そのものであり、「シーニョ」という一つの言語的意味、観念性、概念性形成過程のあり様、その蓄積、母国語集団的な言語の体系の構築過程、人間の社会文化性を背負った、母国語体系の社会的構築過程に重なる。

ところで「言語化以前の欲動の世界（自然）と「構成された構造」（文化）の間を絶えず上向・下向運動を繰り返し」をイメージするクリステヴァは、主体が支配する（抽象界・le symbolique＝ル・サンボリック）に対して、精神病者や文学的前衛に見られる言語の相・欲動渦巻く（le semiotique＝**ル・セミオティック**）を対置させ、意味生成の過程と芸術行為をかさね合わせ、テクストの実践、創造において（le semiotique＝**ル・セミオティック**）を意味創造を産み続ける事としているようである。丸山においても、「クリステヴァの言う、ル・セミオティークの再活性化によってル・サンポリークな体系の再布置化を可能にさせるものとなる。[42]」としている。

※　私の視点として：
（抽象界・le symbolique＝ル・サンボリック）・私の視点としては社会文化性の領域
（欲動の世界　le semiotique＝**ル・セミオティック**）同上　自然生物性の領域と捉え得る
※例えば丸山のイメージの、「意味創造の源というべき、可能性の海」、その様態、「記号化した言葉が閉じ込められている線的世界から空間へ、そして空間から時間へと次元を広げることによって言語を破壊し、言語化以前の欲動の世界（自然）と「構成された構造」（文化）の間を絶えず上向き・下向き運動を繰り返しながら」としており、そのクリステーヴァの言う欲動渦巻くル・セミオティークの再活性化によってル・サンポリーク（象徴界）の再活性化を可能にさせるものとするのではないか。

しかし、言語化以前の欲動の世界（自然）についてのイメージなのだが、主体が支配する（抽象界・le symbolique＝ル・サンボリック）に対置して、意味生成、テクストの実践、創造においての、欲動うずまく（le semiotique＝**ル・セミオティック**）を対置しているが、それは意味創造の源というべき、可能性の海として、その理解であろうか。

しかし、「差異の二項対立関係」において、on/off と言った、シンプルな記号的な応答関

[42] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P176　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

係として、人類は大脳の神経伝達のルートに乗せる、意識に届く感興を記憶としてとどめ得たという私のイメージを負うならば、言語化以前の欲動の世界は、自然生物性そのものとして、それは「自己保存と自己複製」の願望として、その自らの命の継続と生殖願望であり、その双方はレヴィ＝ストロースによれば、自然生物性は永遠に消える事の無い響きを響かせ続け、社会文化への移行は進行すると言う、重合性の中にあると思われる。

⑤　**デリダの差延**・「意味のあるところには、つねにすでに、他への参照、あるいは他による媒介が働いている。そして、そこで不在の形で介在する他のものは、しかし、あくまでも、その記号とは異なるものである限りで、その記号自身によってはコントロールできないものであることから、そうした根源的な媒介性の関係、基本的な差異化の運動には、必然的にずれと遅れが孕まれざるを得ない。（ウィキペディア）」

（意味の生成過程への、「ずれと遅れ」差延を孕むと言う規定性には、言語の意味生成過程は、母国語集団内の意味生成過程に於ける「ずれと遅れ」、多様な思考、揺らぎを抱えた言語の意味の生成過程、コミュニュケーション過程、ランガージュの重ね合いを含意するとも理解される。）

（エクリチュールは、パロールに対して用いられる、哲学用語の一つである。現代において、エクリチュールとパロールの二項対立とその差異に注目したのは、フランス現代思想家のジャック・デリダである。（ウィキペディア）

⑥　**レビナス**は、他者が自己に先立って痕跡を残していることを主張し、それは「けっして現在でなかったような過去」に生起するものであるとする。これら複数の意識活動の総合としての言語的意味の生成過程と重なるであろう。

★フランス現代思想の差異、差延、移行等は、言語表象、ディスクールの生成過程を、その時間性を入れて考察しようとする視点であろう考えられ、それらを人類における言語使用の母国語集団的な蓄積過程、いわば言語の社会的構築過程、おそらくは人類種の、ホモサピエンスへの種的分化の過程を促した、言語使用の集団的蓄積、集団的敷衍、やがてはその身体性、現然の事実としての身体機能、大脳の神経伝達系の生成と構造化、容量肥大へと向かう、言語使用の時間性、そしてその場の力動への考察と重なり合うと思われる。

⑦　レヴィ＝ストロース：神話論理

レヴィ＝ストロースの「野生の思考」において提示された「野生の思考」へのアプローチとしての、「神話論理４巻」において展開する変換過程（暗喩・換喩・反転・中間項を

設定した上での類推・アナロジー）が跡付けられ、神話の構成を項の連なりとして捉えて、その各項の内部のストーリー展開について検討がなされる。項の中での時間的空間的な転換、変換、その他様々な変換についてを、様々な「２項対立のコード」の変換として捉えて、そのストーリー展開上の差異を検討している。

神話ストーリーの各部族間での変換過程は、各ストーリーの項の中の「差異の二項対立関係」の変換として、様々な媒介項を抱えつつ変換されるなどの、神話のストーリーの変換としての姿が浮かび上がっている。

第一巻では、自然から文化への移行は料理の起源によって語られ、その二項対立関係は、生のものと火にかけたもの、新鮮なものと腐ったもの、高いものと 低いものなど、感覚的な事象同士の対立、感覚の論理による対立とされ、人間における 「食」と「衣」の起源は自然状態から文化状態への移行である神話の手放す事のできない 二つの重要なテーマであり、この二つの起源を語る神話の間には相互に変換の関係が推論 され（料理と火、水・裸と装身具）検討される。

二巻では感覚の論理による対立から、空っぽのものと詰まったもの、内のもの外のもの と言った形態の論理に基づく対立へと移り、火を入れて調理される対象である生の肉とな る動物、そして食用の植物の起源を語る神話の変換関係が検討される。

三巻において基準神話 M1 であるボロロの「鳥の巣あさり」に関するアマゾン川源流近 くに住むトゥクナ族の、狩人モンマネキの神話のなかで、食と衣を確保するための労働、 狩猟や農耕(労働)の開始と、死すべき寿命を持つ人間の死の開始が関連付けられ、人間の命の周期性から、女性の生理の周期性、妊娠と出産、季節、月周期、更には天体や宇宙の周 期運動も関連付けが分析される。ここでは各項の対立関係ではなく、項と項の関係という 次元の異なる広がりから、離れた地域の神話の相互の変換関係が探りだされる。

四巻では、それまでの感覚的、形態的、関係的な対立のすべてを扱いながら、北アメリ１巻において、は相互に変換の関係が推論 され（料理と火、水・裸と装身具）検討される。この変換関係、そのこの構造は、人間の観念作用、象徴機能の体系としての変換関係によって構造をなしているところの言語（ラング）に重なり得て、その体系の記号的構成同士（シーニョ同士）の網の目の有りよう、その複層性において人類の社会文化性への展開の開始と進展、深まりが引き続いていると思われる。

母国語集団的に構築された言語の体系性は言語の恣意性としてソシュールによって命名された性質において、それが発声運動という身体運動上、現実過程としての発語の経過の中の線状性によって限定されつつ、このソシュールの定義した言語の二つの性質は互いに同時駆動して重合しつつ、言語音声の配列を揺らがせつつの経過を続けている。言語使用の中の、人間の精神機能の動きを受けつつ、変換の体系の変換を続けつつ、そ

うした言語の体系性であり、人類種の言語使用の現段階と思われる。

人間の精神機能の現段階にあって、(象徴界　le symbolique＝ル・サンボリック）を想定し得る意識性は、原始を後にした段階の、社会文化の相を生きる自我意識の側、近代的な自我意識を前提としての議論として理解される。

人類は、今となっては複雑系としての社会文化性において、(抽象界・le symbolique＝ル・サンボリック）を想定するのであり、生命原理は永遠に消える事の無い響きを響かせていると言う、レヴィ＝ストロースの視点に回帰する視点が、問われるのかもしれない。近代的自我作用の側から、太古の心性を想定するという事であろうが、その混沌の深みの程は、生命原理としてシンプルな様態ではないだろうか。潜在意識を抱え、時間概念を醸成しつつ、抽象機能を持って概念化を達成して幾万世代を経過している現代人における、想定としての（象徴界　le symbolique＝ル・サンボリック）の深みであろうと思われる。現代人における、精神の複層性、そうした様態を反映していると思われる。

※言語表象と人間の意識について、

二項対立の形式で差異を括り出す言語表象→「差異の二項対立関係」から、新たな差異の関係へ、言語的意味の創出過程は、人間の意識、差異の感興が、脳機能、脳の神経伝達物質の反応の機序として成立し、それが集団的に浸透敷衍し定着する経過として想定されよう（関与的・人間の意識内での動きと母国語集団的な浸透過程)。

まとめ 14-16）近代的自我の閉鎖的な構造と言語使用の母国語集団的な言語使用の様態
5000 年ほど前のシュメール文字文化が読み解かれている。

文字使用は、音声言語が、音として寸時に消えゆくのに対し、文字記録は音声言語のコミュニュケーションの時間性、空間性を無限大に引き延ばし、人間の記憶の時空を超えて記録し伝播させる、文字文化の世界がひらけたわけである。

文字言語表象は、時空を超えての、言語集団全体とのランガージュの重ね合わせ
一つの言語表象を、時空を超えて聞き合い、重ね合う事ができる言語使用の水準が現出

エクリチュール（書き言葉）・意味形成生成の運動過程・創出過程・象徴機能の質的拡大をもたらした。

近代的自我への道のり：文字文化・記録される文化（書き手と読み手のランガージュの重ね合い関係）聞き合い重ね合い、意味受容の過程・他者への気付き・自他の差異に気付く、などの謂わば言語現象の拡大深化をもたらした文字文化であり、その始まりは、「近代的自我概念」への前提でもあろうと思われる。

現代思想の展開は、すでにして潜在意識を抱え、時間概念を醸成しつつ、抽象機能の恣意なる展開をもって概念化、その深まりを達成して幾世代を経過している現代人における思想の在り様、その展開について考察といえるであろう。

その場での想定としての（象徴界　le symbolique＝ル・サンボリック）の深みであろうとも思われる。しかし言語使用の始まりは、自然生物性からの要請、「生命維持と生殖願望」に圧倒的に覆いつくされているのであろうから、その中の「差異の二項対立関係」への気付きの重なり合いとして、シンプルな始まりではないだろうか。

「差異の二項対立関係」「On/off」として切り取られ、心的にあるいは大脳機能的に抱えられ、神経伝達物質の反応機序として抱えられた、思考の様態、精神機能の動態としては、記号的構成ゆえに捉え得る、複雑化する事を可能ならしめつつの体系として想定される。それは人種を問わず、社会機構の違いに係らず、すべての（白人、有色人種、文化の違いを超えて、共通的な人類種あまねく共通の)、ホモサピエンスの種としての属性として理解されよう。

人間の精神機能の現段階にあって、(象徴界　le symbolique＝ル・サンボリック）を想定し得る意識性は、原始を後にした段階の、社会文化の相を生きる自我意識を想定する時代において、近代的な自我意識を前提としての議論として理解されるのではないだろうか。人類は互いのランガージュを駆動し、精神機能の深化拡大の中で、聞き合い発語し合い反復し重ね合う過程をもって、自然生物（自己維持と自己再生産）の状態から社会文化の領域へと、移行を開始した存在ではないのだろうか？そうして音響イメージの多様性を獲得しつつ、言語の共時変換を経つつの 21 世紀の我々であろうか。

ホモサピエンスという生物種の進化の道のり、それを可能ならしめた言語的コミュニュケーション過程、聴き手・話し手の言語能力（ランガージュ）の重ね合い・揺らしあいが母国語集団的に浸透し敷衍する過程を想定する。その創出された言語的な意味が大脳言語野に刻み込まれ、その定着についてを、丸山圭三郎は「構造と歴史」と言う章を設けて、（substance/forme)あるいは（実質/関与）としての言語表象についてを、展開していると思われる。

この言語使用する人間の意識作用について、「二項対立する差異の関係」から括り出す解釈としての言語的意味と言う、ソシュールの言語の言語の体系性には感服するほかないのである。そしてレヴィ＝ストロースの自然生物性から社会文化性への移行過程、その現在的な到達段階にある人類と言った規定性をうけいれるならば、そしてソシュールの言語的意味、言語表象、ディスクールの表象過程としての言語的コミュニュケーションの場面を想定するならば、人間社会の全ての領域において、さまざまな不平等問題が生起し得ると

いう事であろう。

貧困と不平等は、別個の概念という事は出来ない、隣接し一部共通領域を抱えた概念として定義されよう。不平等問題には所得不平等問題（貧困と同値）でありつつ、社会関係的な齟齬、劣勢でありつつ（社会的排除）、全ての社会領域に渡っての対等性の齟齬についてを不平等問題として捉える事ができよう。2022/0901

雑感

これらのアイデアは、「差異の感興」が、人間の大脳機能としての、神経伝達物質が脳基質に何だかの経路で到達して、その反応系が母国語集団的に敷衍する経過を経た状態についてを、ソシュールの言語論的な把握、表現としての「関与的」ではないのだろうか。その集積、重合としての言語世界は、人間の意識、精神機能の側からの、己を取り巻く生活世界（substance）に関する、解釈の体系（forme）であり、その体系の地質学的な母国語集団的な蓄積過程、その現時点としての共時変換の体系であろう。

言語名称目録観的な世界像、現前する実態（substance）にもかかわらず、非関与的とされるところの未だ敷衍せず、敷衍せずして失われ、あるいは個的なエピソードとしての体系、その状態を通時変換と呼びうるのであろう。

21 世紀、近代的自我作用を前提に、自我がその内部に抱える膨大な抽象概念、想念性を通して眺めざるをえない私達の、社会文化性の膨大な蓄積過程の最後端において、その中で生物原理、自然生物性（自己維持と自己再生産）を考えざるを得ないのであり、その永遠に消えない響き、その命と生存と生活を思う。

人類の 50 万年の歴史経過が構築した後の、文字の創出は 5 千年前である。文字の開発が産みだしたテクストの交錯については、未だわずか 5 千年の歴史性であり、アナグラムの読解についても、近現代の視点の側から、近代的自我作用の言語使用の範疇からの考察、その有り様とも思われた。

線状性をその性質とする言語観とは、音声言語に関する考察であり、それに対して集団的コミュニュケーション、あるいは獣的な叫びをも抱える集団表象などを仮定すれば、線状性という言語の性質を相対化せざるを得ないのではないだろうか。

そして「意味形成性の運動過程[43]」、は線状性以前のポリフォニーとして地質学的な時間

[43] 丸山圭三郎『ソシュールの思想』P176　岩波書店　1989 年 10 月 16 日

を経過している可能性もあり得る。プリコラージュ的に、「シーニョ」が醸成されてゆく過程、それをアナグラムの諸傾向に重ねつつ、言語の意味生成の機序、一つの（抽象）概念が集団的に互いの関係性をとりながら誕生する経過、音響イメージの生成過程、その集団的な反復、重ね合いとしての「シーニョ」の生成、ポリフォニーであった音声言語表象の流れ、その記憶としてのアナグラムなどと、想定する事もあり得るのではないだろうかとか？

On/off、二項対立関係としての刺激（差異の感興）を捕捉し、大脳にインプットする記号的形式、その集団的な浸透敷衍の経過として、ポリフォニー的な音声、音素集合の集団的な交換過程を通過しつつ、人間の五感、意識作用は、示唆標識として分類される音素の配列関係を、音響イメージとして言語的意味に重ねるのであろう。その構成の多重層化を引き起こしつつの、言語体系を脳内神経伝達物質の反応経路集合として、大脳の肥大を引き起こしつつ、引き続く言語体系の変換、その地質学的な人類の言語使用、その現時点として言語使用を想定された。

ヤコブソンによれば、「一人の話し手が 主体となってコミュニケーションを形成するのではなく、話し手と聞き手が役割の交替を繰り返すなかで、一つのコミュニケーションを達成する。ヤコブソンは、話し手と聞き手という主体が交互に織り成す階層的なコミュニケーションを統一的に捉えようとしていた」とされているという。

―コロナの三密とともにー

コロナの三密、各国の国家は、都市封鎖（ロックダウン）を含めての防疫体制を敷いており、東京は昨年 2 月 27 日午後 6 時過ぎに安倍首相の小中高等学校の一斉休校の要請以来、東京オリンピックの 1 年延期へと、既に 1 年 10 カ月を経過している。

しかし言葉を語り、聞き合う事、音響イメージとしての「シーニョ」は、互いに顔の表情などの視覚情報はもとより、嗅覚触覚等五感を動員してのイメージ性、それら差異への気付きの交換、その重ね合いでもある、互いの言語表象の渦中で揺らぎを抱えるという。

人類の種生成、ホモサピエンスの進化過程、その淵源というべき言語使用の歴史的過程としての言語使用として、今コロナ禍の世界で、顔の表情、息遣い等も含めて、視覚、聴覚、触覚等五感をもって情報を受け取り合う交流関係が遮断されつつある時の流れの中であろう。

人類の自然生物性、恣意なる精神機能の働きを限定する身体運動性を持って、その双方の重ね合わせにおいて、新しい意味を創出する生物種であろう、我々人類の存在様式を問い返しながら、生物原理に拘束されつつ社会文化性を重ね合う、言語の意味を括り出す人類の未来であろうから、それは何だかの形で三密を越えて、互いに聞き合い、意味を重ね合う営みではないのだろうか。人間の抱く差異の感興を重ね合う、それが人類種の生命活動を牽引し続けていると理解する。

そして「社会全体もシーニョを変える事はできないであろう。というのは、過去の継承が、シーニョに進化事実を押し付けているからである。」（社会的構築性・歴史時間性・文化的化石（『ソシュールを読む』のｐ201）としている。そうした交流し合い、言語表象を重ね合い、社会文化性を深化させつつ、自らの自然生物性を充足する為の社会文化の営み、その重ね合わせが我々人類の存在様式なのではないだろうか（2022/09/20）